

翻刻・都々逸

菊池真一

凡例

- 一、本稿は、菊池所蔵都々逸本の翻刻である。
- 一、振り仮名は原則として省略した。
- 一、配列は推定成立年代順とした。ただし、「幕末刊か」とある複数の作品の順序については意味がない。詳細は不明である。
- 一、底本の画像は、次のウェブサイトを参照されたい。

<http://www.konan-wu.ac.jp/kkuch/>

一 『辻うらよしこの集』

(嘉永六年。川辺屋音次郎・石川屋治兵衛版)

辻うらよしこの集」(表紙)

辻うら占ひやうの伝

辻うら占なはんと思ふとき先氣をしづめ心にうたがひをおこさずしてとるべし引やうは
如此こよりのはしに一より十まで印をつけ其内壹本を引本をひらきたとへば一とでるときは
一又は六とあれば六に引合見るべし」(見返し)

序

それ歌占は二神天の巷にさよの手枕はじめにて其古事はしらまゆみゆひ尽されぬ言の葉も逢ふ恋まつこひ忍恋こひもうすひもあるならひふかき色には蕚命(そめいろ)路のやまゝ積る千早振紙をひねりて取圍も逢ふて嬉しのますかゝみちらして見たき」(序オ)

貞操(わがこゝろ)まよひをとらねばこれもよし此道ばかり心底にかけまく神を力ぐさやがて謹上幸ひともめ給ふことなればとふかみ笑み玉へとしか言ふ

嘉永六林鐘 朝辛廻宮 鍋酒誌」(序ウ)

- 一 桜々と浮れて居れどつらや勤に夜をふかす
- 二 咲て居れども浮気な花かとかく香の散庭の梅
- 三 風に狂(くるひ)の柳は本にとけつもつれつ氣がもめる
- 四 たれに人目がある桜ばな笑顔かくせし朝がすみ
- 五 いなせが散行桜は本にとんだ心の置どころ」(壹オ)
- 一 人目兼たるへだての垣をつなぎ止たるふちの花
- 二 散は元より兼ての承知仇に咲した花じやもの
- 三 一夜情にやどりし蝶もともにぬれたる花のつゆ
- 四 本にいろゝ世けんのうはさそしり咲すかおそざくら
- 五 なんば日かげの花じやといふてそれさ胡てうにすがない」(壹ウ)
- 六 散のちらんのみな口々に情しらずがいふさくら
- 七 私しばかりか小蝶でさへもうつつ心の深み草
- 八 よひに曇りし空とは本に雨にやつれの朝ざくら
- 九 今宵しゆびして忍で居れど晴て合れぬおぼろ月」(二オ)
- 一 いつか此身もはや秋風とぬしをかへして跡でふく
- 二 長き糸にしと思ひの中も切てほいなひ風の糸
- 三 糸見切れてかうなるからはやぶれかぶれのかゝり風
- 四 いつか身上市る身はほんに空に心の昇り風
- 五 宵のくもりに笑顔の梅もふけてしん苦のつもる雪」(二ウ)
- 六 ほんに思はにや夢にも見まい覚てしんきな事ばかり
- 七 逢ふた思の咄しにつけて聞もしんきな明のかね
- 八 まてど便のない此ごろをにくや空引鐘の声
- 九 心しらずか此ふける夜を月に浮るゝやほがらす
- 十 なぜか添はれぬ此身はほんに結び違ひかゑんの神」(三オ)

- 一 りん気しながら書たるふみも筆に根をもつ恨事
- 二 水の行末と此身はほんにいつかはてしがないわいナア
- 三 思ひこんだる此身のそらを聞けばぬしあるあなたをば
- 四 嬉しもつれもとけそゝくれて千話も苦ぜつの種となる
- 五 すゝり引よせ思ひの外にしあんするすみかろくない」(三ウ)
- 六 つもる思ひにはてしがないふていつかときないふじのゆき
- 七 はれて添はれぬ恋じの闇に昇りつめたる身の苦勞
- 八 本に一夜がつい重なりていつかおもひのたねとなる
- 九 真事つくしてとけ逢ふ中も嬉し仮寐のたびまくら
- 十 浅イ心でついはいまりこみ本に深いは恋のじやう」(四オ)
- 一 心ならぬまた取だしてしがむ反古のぬれもんく
- 二 本に夜毎にわはるはまくらいつか替らぬ我が思ひ
- 三 ほれた私じやどふなとさんせなぞと手くだで乗かける
- 四 心尽しも此身の仇か本にはいない里はなれ
- 五 しやんなげ首引さく胸のかんにん袋がぬはしたい」(四ウ)
- 六 やがてはれたら思ひの儘としばし此身の軒の月
- 七 かよふ恋じの夜道はほんに人目かねたる鳥おとし
- 八 曇る思ひの空さへ今は晴て世間をわたり鳥
- 九 しばし別れも苦になるつらさ思ひ啼する小夜千鳥
- 十 かよふ伝手なき闇路に迷ひ心とりつくむら千鳥」(五オ)
- 一 恋にや苦勞のしのびの頭巾ほんにうかつにやぬかりやせぬ
- 二 定めなにかやツイもやゝと晴ぬいろもつむらしぐれ
- 三 深くつもりし思ひの胸もとける時節を松のゆき
- 四 宵につもりし柳の雪も今朝はとけたるふりもない
- 五 背中そむけてすげなくぬしは空に心を置ごたつ」(五ウ)
- 六 ほんに別れがつらいといふて名残夜明をかへる雁
- 七 秋の千草も夜の間のつゆにぬれて嬉しき色をもつ
- 八 浮気ながらも世けんを晴て味な色もつ女郎(おみな) ばな
- 九 思ひ定めて手折し枝も人目兼たる道のはな
- 十 迷ひこんだる思ひの道に乱れ咲する野べのきく」(六オ)
- 一 本に色づきやゆだんがならぬじぶ柿にもむしがつく
- 二 エゝもにくひよ今宵の月よ晴たばかりですいがな

- 三 すまぬ心と今宵の月はしばし人目の雲がくれ
- 四 同じ添寐の袖すり逢ふて友にぬれたる萩のつゆ
- 五 それた咄しか今宵は本に含ぬきぬたの拍子ぬけ」(六ウ)
- 六 逢ふて咄しも聞かない内にゑぐひ氣じやとはどふよくな
- 七 つゝむつらさが此身にあまりやつれましたよ此とをり
- 八 ぬしの手切に此身はほんにふかく思ひもうすくなる
- 九 出たり這入たりする身はほんに外にしやんも有間筆
- 十 袖を引とめ羽織をかくし逢ふて此まゝかへさりよか」(七オ)
- 一 愚知な五色の色あらはれてしやばん玉ふくふくれづら
- 二 つらや此身は山はとゝぎす啼にや此夜が明されぬ
- 三 なんばすきとでどろたの中へはまりよごれるきりものが
- 四 そらにいけんを聞身はほんに恋にやうつゝか目がさめぬ
- 五 むだな手をさすつのりししやくも外に押人(をして) が有わいナア」(七ウ)
- 六 色けはなれた此身はほんにやつれすがたのかれ柳
- 七 合ぬ苦ぜつにへだてが出来てはなれゝに寐る今宵
- 八 勤する身にじやうずが出来て客にはらうり花もうり
- 九 やつれはてたるこの身はほんに思ひ入江に枯柳
- 十 思ふ当りに人目がなくば私しやりん氣がして見たい」(八オ)
- 一 傍(あた)り見廻し人目をしのび家根でしゆびする千話の猫
- 二 晴ぬ思ひにといはらゝと落る涙のつゆしぐれ
- 三 月夜からすと此身(ママ) 本に思はず一声啼寐入り
- 四 広い世見にせまいは住居今は氣儘の膳(さし) むかひ
- 五 きゆる思ひにはて氣がもめるなぜにもへ杭火が付ぬ」(八ウ)
- 六 人目なけねばどうかうもりとふかくおもひに更る月
- 七 はれた色どり今あらはしてたて、見せましょ虹の帯
- 八 あつさまざれにりん氣と共にたゝくうちはの拍子ぬけ
- 九 宵の曇りに隠れた月が人の寐てからさへて出る
- 十 待身つらさのうつゝのゆめに仇にして開明の鐘」(九オ)
- 一 ほんに勤のつまともならばにくや男はたゞ一人り
- 二 我身わすれてくるふもむりか恋に氣が氣じやないものを
- 三 切てからんで柴垣にくやへだてする木が庭にたつ
- 四 知らぬおもひの種こそまして昼夜思ひの仇となる

五 明ぬ岩戸が其儘あらば今朝の苦勞はせぬものに」(九ウ)
 六 あつこと葉につい乗せかけて先か真事か石清水
 七 露に添ふとははかないものをみれんらしくも月かすむ
 八 あだにもまる、身はほうづきの末は根引の里はなれ
 九 君をしたふのまつむしならでいまはそれとも草の中
 十 露の道の辺踏分かねてひよんなこ、ろのおきどころ」(十オ)
 一 おだてさんすなそりや門違ひこれがじつならかくしやせぬ
 二 煙くらべの吸付たばこぬしは氣を引事かいな
 三 つゆにうつろふかれの、はらに今は侘しき年の暮
 四 へだてられてか見るさへいとゞ目ささかすまる袖の月
 五 今はせけんもはれたる月と解て見えます雲の帯」(十ウ)
 六 空なおもひの月とはほんにしのお闇路もあるものを
 七 かよふ伝手なき心の関をしらで住行須磨の月
 八 末のちからの水すじあつてやせた根をもつ九十九草
 九 千話のほうくでまゆげをかくしにあひますわのなんのかほ
 十 これが嬉しの涙と変りやいまをむかしのかりぐさ」(十一オ)
 一 へだである身のしのびの色は梅も闇路の香をしたふ
 二 月もこ、ろ曇をおくしなぜか明りがたてにくひ
 三 いとしかはいが此身にあまり寐るもねられずにくふなる
 四 逢ふた其日がおもひの種よ寐ても覚てもうつ、にも
 五 いまの団(うちは)に鏡をつけるうつりやすひといふ事か」(十一ウ)
 六 うつ、笑顔にふとおこされて顔もあかつくまくらあて
 七 もつれご、ろの悪性ものと風にすねたる糸柳
 八 主のおもひも晴れたる今宵水に真事をてらす月
 九 草の下水つ、むにあまり瘦て本意なく外にもる
 十 当時流行の杓子でさへもいつか世に出て飯(ま、)に添ふ」(十二オ)
 一 しらぬ水鶏に戸をた、かれてふいと待身が明にたつ
 二 苦絶しらけて寐る夜の床にあらぬおもひの夜着の中
 三 ないて嘘ある世の中じやとてわらてまことがはなりよか
 四 忍ぶ苦勞にあかしを立てとんだ螢のすいがない
 五 深き契りの千代まつむしも秋の名残に声た、ぬ」(十二ウ)
 六 つとめする身じや盃やうけよがいやみさんすはうけにくひ

七 うつり易さの世をしのびして露も真事の草におく
 八 水に苦勞をする身はほんに深くおもひにつくもぐさ
 九 仇にそめてもこふなるからは(六文字不明)にやなりやせまい
 十 同じ月でも三夜はあだよ宵にてらして見たばかり」(十三オ)
 一 たとへあだでも始の事よちれどうれしき瓜の花
 二 ぬれたおもひを今朝あらはして恋にうつ、の目なし草
 三 恋の浅瀬か水枯はて、深い中でもわけられる
 四 色をもつ身の朝がほさへも露のひぬ間はたゞしばし
 五 にくや二人りの相合傘もくちにせりふの恋の実」(十三ウ)
 六 解てうれしき帯こそいまはあだに結びし夢の中
 七 あだな三すじによる身はほんにむねの調子が定まらぬ
 八 咲かせられてのついで初が風のうはきに散さくら
 九 袖をぬらした相合傘もすゑはらんちうになるわいな
 十 思ひがけなき此身の関にいまは流もしのびみづ」(十四オ)
 一 浪にたゞよふ月かげさへもゆられながらに添とげる
 二 こぬに時さへ聞きたびれておもひやりさへ夢に見る
 三 松により添ふ葉ざくらさへもともに青々色かさね
 四 たまに逢ふ夜の此みじかさをこ、ろしらずのあけがらす
 五 時節おくれ世にでる花をかへり咲とはどうよくな」(十四ウ)
 六 鳥の音づれすまして聞にくや羽風がうわきふく
 七 すぐなこ、ろのみすやの針も主しの持やうで横になる
 八 しげる中からたま／＼見せて苦勞する葉が色になる
 九 おもひ切れとや夕部の雨のはれ間しらぬ我おもひ
 十 ほんにわたしは雨夜の星よどちらこちらの隔なく」(十五オ)
 六 しばし待間もこ、ろがせける逢ふでおそなれひがない
 七 さそふ嵐にみだれもしよが花も霞にかゝるもの
 八 深くかくせど若葉にまじるたれがさかせた残り花
 九 文のたよりについほだされて恋によるべのつてが出来
 十 咲ていれどもへだ、るものを人のつらさを花に見る」(十五ウ)

草紙物板行おろし処

大阪心齋橋淡路町北へ入

川辺屋音次郎

同平野町

石川屋治兵衛 (裏見返し)

『月夜からす』 (安政元年)

新板と、いつふし 初編 (表紙)

月夜からす

甲寅春 夕暎遮屋画 (見返し)

月夜鳥序

鐘ひとつうれぬ日はなし江戸の春明わたりたる賑ひは屠蘇のきげんに鞠うたのはづみが附て遣羽子に飛だり刎たりすれば傍から風がうなり出すやら二日の晩の初夢の白き鼠がちるやら物ごとにかれることのみ多かりけり其中に猶もうかる、たねならんとてうかれぶしの種々書集たる此草紙に月夜鳥と名つけなんかしさるは誰も買ふ彼も買ふ唱歌もあたらしくて能かつたネエ藤八文奇妙じやとアメリカの場するなる千里の敷の外々まで御評判の玉やゝを希といふことを

あら玉のとらのはつ春

板元に代りて 敷島遮屋道芳誌 (一オ)

△おつにからんだあのいかのぼりたれがしやくつてきたやら (一到)

△角な世界にわたしとおまへ丸くたのしむ月見酒 (オク山 亀鶴)

△花はなけれど見ざめのせぬは手入とゝいた庭の松 (小哲) (一ウ)

△義理といふ字は是非なきものよ花を見すて、かへる雁 (夢楽居)

△□うつり安さよう秋風にうらみがちなる葛の花 (けい)

△□人めつ、めど野ずゑの尾花いつか穂に出てあらはれる (ナリコマヤ 児雀) (二オ)

△こがれゝて行海士小ぶね須磨ぬこ、ろをあかしがた (はる)

△離によう似た箱入むすめしやうのわるひかむしがつく (已醒)

△はでない香に似合ぬ茨 (ばら) よおつなところにとげがある (はる) (二ウ)

△うらみまずぞへ出雲の神よそはれずは他人でなぜおかぬ (新史)

△まつた心のゝけばほんに逢夜みじかき夏の月 (徐来)

△うき名たつ田のかはい、中はうまい笑顔にちる紅葉 (児雀) (三オ)

△とけぬおかたをうは気でこねてせじで丸める雪達磨 (けい)

△かくれみのわに世間もせまく笠にきるのはぬしばかり (児雀)

△たつたひとよのうきよにつきて雪にはかなき九十九夜 (新史) (三ウ)

△ゆきの肌のあのおのふじの山とけた素顔をみはのうら (夢楽居)

△すいた同士も人めのせきに背中あはせのすゝみ台 (花よし)

△ぬれてうれしき苗代水よすゑはたのしきたねおろし (小哲) (四オ)

□つくるいろかについひかされてこ、ろそめゐのきくのはな (小哲)

□かげじやとやかういふてはみれどあふていふべきこともない (庸哉)

□ねやのはなしもまだあとやさきこ、ろうれしさはづかしさ (旧池) (四ウ)

□賤がふせやでもみする白もひくてあまたでやるせなや (児雀)

□ぬしはしらつゆわしや溝のはぎ水にみだる、ものおもひ (旧池)

□ぬしをまつ身は野にすむむしよ夜ごとゝになきあかす (徐来) (五オ)

□はれて雲なくこよひの月にむねのうちをもあかしがた (夢楽居)

□なまじあふみのまつかひありてぬる、うれしさよるの雨 (旧池) (五ウ)

□かたきどうしとおもひし鳥もけさはうれしきはつがらす (新史)

□けいせいにあるしまことは山ほと、ぎす実にはうはべはそらでなく (已醒)

□けぶりたつのはあさまとふじようきなたつのは恋の山 (六オ)

□月をまつむしこがる、はたるおもひゝてよをあかす (徐来)

□毒としりつ、ついでを出してやすによされぬ鰻のあぢ (一到)

□松はたかさごもしろしらがますますゑはたがひにそひとげる (旧池) (六ウ)

□心あかして夜はしんゝとつもるはなしもけさのゆき (旧池)

山路へだて、妻こふしかのこゑもかすかにさよあらし (催主 徐来)

風にもつれてこよひの雨にぬれてとけたると柳 (全 庸哉) (七オ)

苦界しらずのま、あどけなくまりやはねつく春をまつ (出者 本万)

あふてわかれるうさへもすゑはひとつになるみがた (出者 大はる)

すだのさくらをあれみやこどりほんにあづまの春げしき (催主 一到) (七ウ)

えんはきれてもこ、ろがのこりくられてみにゆくはつのぼり

やすな葛のは身はとりおひの恋路はたれしもおなじこと

けさはうれしきあれはつどりよないてわかれたこともある (八オ)

ためをおもふてかへしたものの、道がくらうでねつかれぬ

割て見せたやこ、ろのたけを人にいはれぬふしあはせ

雨にみだれしあの花のかほ何をおもふかうつむいて (八ウ)

わたしやおまへにみないりあげてあつくなるほど丸はだか

無事でわかれてまたくるものをないてかへるやはるの雁

うき草のやうなねもないわたしじやとても水にわかれてゐられうか」(九オ)

果のはてまでみわたすやうにはれてうれしきはつ日の出

ゆきのふるのにさむさもみせずのほりつめたるとしの坂

おもふ心はみなうづみびのきえてわびしきねやのうち」(九ウ)

神かけておくる玉づさこ、ろをこめてふでのいのち毛きれるとも

とけたはなしにこ、ろも花もひらきそめたるふく寿さう

こ、ろせくま、つかきそめて反古にやならないこのくらう」(十オ)

はるのはつゆめ笑顔と糸がほならぶまぐらのたからぶね

ゆきのあしたも雨ふるよはもないてこがる、ねこの恋

ふとしたことにもあふたがばちかいまはかなや遠ざかる」(十ウ)

定めなき世の身のうきしづみ人にしれとかちるさくら

人にとはれていまはものみぢすゑはうきなのたつた河

ざりとなさけのふたすぢみちはゆけばゆくほどしんのやみ」(十一オ)

あさなゆふなにきなる、とりのこゑもにほふかうめの花

風のつよさにきれては見たがまたむすんであげる風

じやまになるかとあのよこ雲がはれてうれしきはつ日の出」(十一ウ)

たよりまつむしかたこと鳴きに秋がくるかとあなじられ

いろもかなきわしや山ぶきのいつもかきねの外にされ

月にむら雲かさなりあふて未はやみ路のほと、ぎす」(十二オ)

恋のじやまするあのあけがらすかあいとなくは気がしれぬ

花にも、たびくる客よりもゆきの初くわいがたの美しい

宵のくぜつのかひなにのこるいろはゆかりのかきつばた」(十二ウ)

待てまどろむうつ、の耳へはつねうれしきほと、ぎす

おつないきぢで散ても見たが又もみれんでかへりさき

風におちばの中にもわづか咲てめにたつかへり花」(十三オ)

どくだおよしとはたからいへばなほものみたいたつ水

こ、ろ定めておく玉づさに落るなみだのつゆしぐれ

いと、つゆけきまぐらのもとにたれをまつむしなきあかす」(十三ウ)

雲のおび雪のころもみなうちとけてすがたあらはすなつのふじ

うきなたつなみ身はすてをぶねないてあかしのさよちどり

夫婦げんくわは三日の月よひとよ」に丸くなる」(十四オ)

ひなの心で千代よろづよのすゑがすゑまでくらしたい

待たこ、ろのとゞいてけさはないてうれしきほと、ぎす

むねのとけいのくるまがくるひあはぬそのよのねのわるさ」(十四ウ)

どこのおかたがあひめ松をひいてねのひをあそぶやら

はじめたはぶれついじやうだんがいつかまことにつむつくし

ゆきのうちからこ、ろをとめてたれがつむやはつわかな」(十五オ)

二三『度独逸大成後集前冊』(安政七年。品川屋久助版)

〔文句人〕都々一節用大成」(表紙・題簽)

新撰ど、逸大成 前集

もんく入前編

歌沢能六斎輯

当世堂梓」(見返し)

この集はもとより文句の新古に拘らず作意の能人情に通じたるを数千万章あらび成してひとつのとぢぶみに做さまく計りつ既に大成と号しかども尔では紙数いたく嵩みてすき人の玩ぶにも寔に不便なるのみならず書肆が胸にも一物ありとぞよりて前後集をかくのごとく前後四冊に分てどもみな是一時の手輯にして殊に倉卒の筆記なればなほ」(口ノ一オ)

漏脱もすくなからず丹は拾遺編にあらはして亦前後冊と做さんのみ

安政七庚申のとし花月のなかば沙量なればこそ甘口なあべ川町に飯ずまひして与次郎氣どりに飯ごしらへしつ猿にもをとる梅星爺の

鰯寒翁まじめにするす」(口ノ一ウ)

目録

義太夫 唄員十有七章

常盤津 唄員四十四章

富本 唄員三十章

清元 唄員四十八章

長唄 唄員三十五章

一中 唄員九章

通計一百八十三章」(口ノ二オ)

天明九年出版の洒落本自惚鏡(振鷺亭作)の巻中に(金)エ、ちくしやうめ(八)(ほうかむりをしながら)(唄)わたしやかさのしやうでさすきじやけれどおまへげたのしやうでは

きたがる云々とあるは今のねんねこぶしか蓋ねんねこさい／＼はど、一のひなびたる節といふべし

(絵省略)

こは右の自惚鏡に載る所の縮図なり(口ノ二ウ)

度独逸大成後集前冊

歌沢能六斎輯

○文句入の部

義太夫

男につくのがおなごの道よ(「しち店ノ段」とゝろかす胸も板えんそろ／＼としのびいでたる娘気は恋路のやみのくらまざれ)不孝といはりよがなんのその

のほりつめたる二階のはしこ(「てらこやノ段」あすの夜たれかそへぢせんらむうぬめ見るおや心つるぎと死出の山こへてあさきゆめみしこ、ちして)(一オ)いまさら目がさめあきらめた

こゝろがから浮気なぬしに(「をかざきノ段」ア、コレ申しもふ何にも申しませぬ顔は見ねども云なづけの男持のがうるさ、にやしきをもどつた其時から尻になる気でけさ衣けふ一日に気がかはり染ちがふたるかね付の元のしら菌とすみ染にそめ直してもはがしてもおもひそめたばんうの)わたしでわたしの気がしれぬ

人めしのんで恋ぢの関を(「新口むらノ段」それはうれしうござんせうさりながらわたしがと、さん)(二ウ)か、さんは京の六条じゆずや町こへてたふげの又くろう

きるに切れぬ悪えんなれば(「おびやノ段」わたしも女子のはしじやもの腹もたつしりんきのしやうもまんざらしらぬじやなければにもかわい、とのこに氣をもませわづらひでも出よふかと)どふかしなよくするがよい

もとゆひの切てしまへば根も葉もないが(「白木やノ段」そりや聞へませぬ才三さんおまへとわたし其中は)(二オ)きのふやけふの事かいなやしきにつとめたその内にふつと見そめてはづかしい恋のいろはをたもとから)きけばき、ばら腹がたつ

およばぬ恋路としりつ、ほれて(「すしやノ段」たとへこがれてしぬればとて雲井にちかきおん方にすしやのむすめがほれらりよか)とはいへ女房のあるおかた

秋の夜風の身にしみ／＼と(「いざりせんべつノ段」つきそふわたしは女子の身ちからにおもふぬしのみは腰ひぎぬけて足なへ)(二ウ)となりやつれたるふうふがるろう)たれをまつむし音もほそく

蹴のかふむのかぶつならぶちな(「せんだいはぎ」なんともないとじうめんづくりなみだは

いづれどおさなきにほれたたさが一ツぱいに)おまへにまかせた此からだ

やぶれかぶれと身は三味せんの(「あだち三ノ切」おねがひ申奉る今のうき身のはづかしさ父うへや母さまのお氣にそむきしむくひにて二世のつまにもひきわかれなきつぶし)(三オ)たる目なしどり)くろうするはづ親のばち

すまふとりをば男にもてば(「いな川」江戸長き国々へゆかしやんすりや其跡のるすはなほさら女氣のひとりく／＼ものあんじ夫にけがないやうにといのる神さん仏さん妙見さまへせうじんもどらしやんして顔見るまで)かた時こゝろはやすまらぬ

おもひ切とはむかしのことよ(「ほり川」そりやきこへませぬ伝べえさんおことばむりとはおも)(三ウ)はねどそも逢か、るはじめよりすへのすへまで云かはし互にむねをあかしあひなんのえんりよも内証のせはしられてもおんにきぬほんのめうと、おもふもの)おもひきられる義りかいな

おもひつめたる氣はひとすじに(「あさがほ」またも都をまよひ出いつかはめぐり逢坂の関ぢをあとに近江路やみの尾張さへさだめなく恋し／＼に目をなきつぶしものめいろも水鳥の陸にさまよふかなしさは)(四オ)ぬしにどふしてあはれよふ

そんなつれない云わけばかり(「しちみせ」おそめは顔をふりあげてそりや曲がないどふよくなたかひもひくいも姫ござのはだふれるのはたゞひとりおやけうだいもふりすて、このごにつくが世のおしへ)女ていきん見やさんせ

女ごゝろのたゞ一トすじに(「のざき村ノ段」あんまり逢たさなつかしきにくわんおんさまをかこつけてあひに北やらみなみやら)きて見りやつれない事ばかり(四ウ)

人のいけんも火水のせめも(「ことせめノ段」さらばといふ間もないほどにせはしないわかれぢはむかしのきぬ／＼引かへてもめんもめんとおちぶれし)かうなりやなほさら切られぬおまへの浮氣をしりつ、惚て(「かみぢ」なかしやんせ／＼そのなくなみだがしゞみ川へ流れて小はるさんくんでのむわいな)りんきするのめぬしのため

○常磐津

ほれた性根をついうちあけて(「かつら川」はづかしい事若はしのよる)(五オ)のちぎりもあだまくら)もうどうあつても切はせぬ

にくらしいほどやさしき糸がほ(「同」なんにもいわずふりそでのたもとかざしてかほのぞき)これがほれずにあられふか

ほどがい、からうわきがこはい(「いなか娘」こちも木竹じやなければも仇な糸にしがむすばりよものか)しんじつなさけを見たうへで

あまへたれるもわがま、いふも(「かつら川」ちいさい時からおまへにだかれ手ならひせい

といはしやんしておてはんかいてもらふ」(五ウ) たがいろのいろはおつしやうさん」おまへのほかにありはせぬ

ほどがい、からついまはりぎも(「?」) つかとけゆく女氣やたがひにあかすしんじつの心に鏡をかみわけて」きつと浮きをおしでない

したふねがひもさきへはしれず(五人ばやし) ぐちなくりごとあどなさにくひさき紙のゑんむすび」むすめご、ろにやむりもない

恋の風ひきやアこ、ろもせまく(「せきのと」) おもひにたへかねひとふでとかきそめしより明くれの」(六オ) 文のたよりをちからぐさ

月のすみだのゆふべにぬしを(「たきやしや」) 見そめてそめてはづかしの森のしたつゆおもひはむねに」とけぬくろが痛となる

わけをいふても氣ばかり引て(「うとう」) 千づかもあだに朽よとはあまりにつらきこ、ろざし」どうしたら思ひがはらされふ

くぜつしながらとけるも早く(「まさかど」) をびかくさる、たはむれもにくうはあらぬうつりがに」かへしやさみしい床のうち」(六ウ)

あきがきたのかおまへの邪見(「どんつく」) なまじかうせぬはじめならおもひきる瀬もあらふのに」わたしやしみつ」かなしいよ

口へ出さねど男のくろう(「いな川」) おしてははれぬもつれがみびんのほつれをなでつける櫛のむねよりつまのむね」ないて見てゐるときでない

かむろだちにてはねつく娘(「忠のぶ」) ひとごにふたご身はよをしのぶいつかむかしなさ、めこと」どこのとごにそふである(七オ)

袖からおちたる文とりあげて(「せきのと」) これ此やうにはじめからきせうせいしをとりかはしつかいおかたがありながらかへしておいてまたわしに」いろよいへんじはあきれるよ

ほどもきりやうも勝たおまへ(「同」) いったいそ様のふうぞくは花にもまさるなりかたちかつらのまゆずみあをふしてまたとあるまいおすがたをおくげさんがたおやしきさんおふくの中で見そめたが」人のほれぬがわからない(七ウ)

わかれのつらさにかみかさあげて(「しのぶうり」) 二世のかためとだきしめてつい手まぐらのそ、けがみ」あ、もじれつたい明のかね

七ころび八をき山ぢををばつかなくも(「むねきよ」) やがて小はだの山こえて馬はあれどもかちはだし君を思へばゆへぞとよあるくものには花もみちはなのてくる手をひきて」また

もふきに袖ぬらす

ふとした系にしがかさなりあふて(「八オ」) (大江山) 二世を三世とみだれ合その夜はわかれて矢ぶみに日ぶみまたのごげんに夜いくせんとしらし屏風をこだてにかまへいまや／＼

とまちかけたり」かたときあはねば氣にかゝる

ぢれつたいほどおもはせぶりな(「?」) いなかものじやと思ふてからにあんまりなぶつてくれめすなじたいそさまのやうな美男をとこのくせとして女子たらしのすてことば」こちも木竹じやないわいな」(八ウ)

かぞへられたるもの、ふさへも(「一人かけきよ」) ねびくわんを出しにして夜ごと日ごとのかちまふで雨にもゆきのぬれ事はちつとせんぞへ申わけたらぬくぜつこのしを今宵はぜひにござんなれ」なりもしどなき雪の朝

ぐちがかさなりまた目もうるみ(「はん七」) はるの雨またちらすのはるの雨そらはれやらぬむねの戸をあけなば人の口のはにかゝるもまよまよ、ならぬ今のおもひをもしほぐさかく(「九オ」) とやぬれし身のはては」むねにもちこすよひの雨

実にしあんのほかとは是か(「みつのあき」) きやくにせぬよのうれしさをうかぬかほして隠しづまなぶられたさのものをずきはづかしいじやないかいな」まようこ、ろはわれしらず

ふけて夜風の川おとほそく(「おはん」) 御いけどをりもかけすこきやなぎのば、をよこにみていそげばなごりをしこうちつまにもわかれかねの音も涙ふくみて雨ぞふる」(九ウ) あや

にからまるいとやなぎ

うつりやすきは世の人ご、ろ(「みつのあき」) うきよは夢のやるせなくちよには矢をいるしほどきもてうどよいころ首尾の松ふねじやさむかるきてゆかしやんせわしががへの此小

袖」わしのこ、ろもさつさんせ

きぬくくのこるたがひのくぜつのもつれ(「小いと」) よふそんな事いさらにいわれた事かなんじやいぬちたい二人りは云なづけうきにわかれてかなしさは」(十オ) とけぬおもひ

のむねのあや

いふた一トことほぐにはならぬ(「おかめ」) きくにおかめはなみだぐみそりやおまへなにをいわしやんすしうげんをしたといふばかりでそれなりにあのはきはぎ心のしれぬわたしゆへ」

はかにしあんをおしのかへ

なんでもつ、めば包もしようが(「おそめ」) おもひをつ、むふろしきもかたにはかるきてふ／＼のそでにひら／＼たもとにひらりひらぐけをびも解か、りこ、ろもとけたか、へ」(十ウ) をび」人目はかりはつ、まれぬ

しづのをだ巻くりことながら(「忠のぶ」) むかしをいまになすよしもがなたにのうぐひすはつねのつゝみしらべあやなすねにつれておくればせなる忠のぶが」こひのしらべのもつれ糸

三味せん糸の糸のもつれてどうなるものか(「梅川」) かほつれ／＼とうちまよりそれそのよふにいわんすほどこの梅がが身のつらさはれた女子のせう」(十一オ) がにはあだなつとめ

をじつにして」いまは人目をしのびごま

たとへどのよな水さすみでも(「水うり」)おいてくれこ、がなだいのあづまつ子気もはびろなひぢりめんはだか百くわんしよふともはつがつをなら見のがさず」わしがこ、ろはにこりやせぬ

うた、寐してさへしびれるものを(「げん太」)あすなぶられふもま、にしてこ、ろでやほなとこいそぎしこきもわきへなげしまだまくらの下へ(「十一ウ」)やる手さへ」さぞやお手、がいたかるふ

手なべさげるもうきよのならひ(「おはな」)とかくうきよはなアいろとさけ二道かけしあき人のあめにもゆきにも打になひあたりはづれぬ上かんやかたにはもちのこしつよくちぎりかさなるいろ上戸あひざめしらぬ下戸のとく」やきもちどころじやないわいな

なまじ初手からやさしくなくは(「あはしま」)はでやうわきのなかでさへしんじつしんの二世三世(「十二オ」)やくそくかたき女房気はうれしかるふじやないかいな」いまのくろうはぜひがない

えんもゆきあふ二人りが中は(「おふさ」)むぎの青葉に風あれてきのふのま、のびんつきはのちの人めと立よりてあいたてなさのつけのくしさしもならはぬかちはだし二人りつれたもいんぐはどし」こ、ろひとすじおなじみち

つもる恋路のたふげをこして(「夕ぎり」)ふゆあみ笠のあかばりてかみこの火うちひざのさらかさふきしのぐしのお草(「十二ウ」)しのぶとすれどいにしへの花はあらしのおとがひにけふのさむさをくひしはるはみだしつばもかみかびてこじりつまりし師走の日」越すにこされぬとしの関

あきずあかれずそひ逐たさに(「白ふち」)おやのかたみのでんばたやきみなほうらつにさんしてもいとと思ふこ、ろから三とせ此かたこなさんおぼへてござんせういけんがましいこと、てはついにいちどもいわぬのは」いとしかたとおもやこそ(「十三オ」)

ぐちと枕をひよくにならべ(「三かつ」)アレまたやつぱりそんなこといふてなかせて下さんすなこれがせけんにあるふれたいろやうはきじやあるまいしよてはしられずしらぬどしわやくなえんを神さんがひよんなおせわの其のちにつきぬえにしを松のもん」いろとこひとのかげひなた

むりなことじやがこりや是ぎりよ(「いにいな」)そりやなにをいわしやんす今さらあによいもうと、いふにいわれぬこい中はおもひ玉子のしんたきにかけたね(「十三ウ」)がひのいくひろか日にましふかくなるたけは」あだな浮名のた、ぬやう

まだいろにそまぬま、なるしら菌の娘(「宗清」)たづねきそちのたびまぐらはやうお顔のみやこをばかすみとともにたち出ていつかあふみやみのはてもどふしなるあさましや恋のたふげもうすめとは」かほにほんのりちるもみち

おためごかしにたゞうかくと(「小まん」)わたしはにはにたちばな(「十四オ」)の香にせ、られてほと、ぎすあじなおふせを松のゑのつま戸をそつとあけかけておくのしゆびをば待合の夕だち風にむなさばき」それがこうして癪となる

せうちしながらつい待わびて(「おつま」)かねもろともにしのびいではる風さむく身にしむもつれなやにくやその人をやつきりきりくきりしまつ、じくれなゐのはなとみへしもあいの夢うき世のゆめとさめ鞘の(「十四ウ」)ひと夜あはねば氣をまはし

たとへ此世はあきらめやうが(「二のたに」)此世のえんこそうすくとも来世ではすへながふそいとげてたべわがつまと顔にあて身にそへて思ひのかぎりこへかぎりなく音はすまのうらちどりなみだにひたす袖袂」二世のしやうこがわしや見たい

すへをわたしは待かねがふち(「八百万」)五百ざき恋しすみだ川二ツならべし枕ばし其しゆびの松まつち山そふてみのわとあけくれに日本(「十五オ」)づ、みの神さんへむりなねがひも恋のちゑあさぢが原じやないかいな」はやく中よくめうと石

しらぬわたしをなぜ惚させに(「しのぶうり」)すぎにし梅の花見月めみへはじめと手をついてふつと見あはすかほかは」来たのがおまへのあやまりさ

○富本

いろじやくとわけしらいと(「あさま」)そめて悔しきなれごろもありしながらのひとつまへ(「十五ウ」)こつまそろへてしどけなく」ひざにもたれて愚痴ばかり

じつと抱しめ顔見合せて(「小いな」)ぬれていろますからさきのまつ夜はつらき床のうち」下になる手のいたいほど

たかいおかたに惚まいものよ(「まつ風」)かはるまいぞやかわらじとあふせうれしきいらへさへ」ごめんあそばせひぢまぐら

いけんいふのはおまへのやばよ(「おきく」)まことをいは、このみちは(「十六オ」)親のま、にもならぬがならひ」義理もせけんもいるものか

たまに来てさへそのすねことば(「忠のぶ」)宵に寐よとはきぬく」にせかれまいとの恋の欲花にしらむがじれつたい

どんなうはきをしよふもしれぬ(「まつ風」)とのごの心はあすか川ふちが瀬となりてりふりしれぬたとへ事」一日あはねば胸さはき

おもふにまかせぬ山ぶきいろよ(「むしうり」)われはおよばぬみのむしなれば父よとなかで(「十六ウ」)恋に身をやつれはてたるきりくす」きつと思案をせにやならぬ

深くなりやふかくなるほどま、にはならぬ(「かぐらじ、」)くどいふのがおまへのくせかなんぼそのよにせかしやんしてもあふにあはれぬあだ中をどふがなしゆびをこしらへて」む

りなあふせがなはたのし

したゑだのまゝなるはなはこゝろになくて「(お七) あいといふのも人めのむねにくよく／＼きくばり」(十七オ) そこかこゝ、かとこゝろでははいまつわる、ふじの花こひにゆるしのいろならん」とゝかぬこずゑにくろうする

見られ見らるゝ互のやつれ「(う) 目もとしばよるちりめんのふたへまはりのかゝへ帯つゐのかたみとなりふりもわかばにくらきなつこだちむぎふくかぜもおつてかゝ行なやみてはたちどまり」袖もつゆけき旅ごろも

中をせいたるあのよしの川「(ひなどり) ほんにそれよくちでいわ」(十七ウ) れぬこゝろのたけかねてしたゝめおくやまのしかのまきふでふうじぶみこひし小いしにくゝりそへ女のねんのつうぜよと」おもひこめたるいもせ山

二世も三世もそのさきの世も「(まつ風) かはるまいぞやかはらじとおふせうれしくいらへさへどふいふてよかるふやらおもひなをせばかこつ身をいのれどさらに神さんも」せうちでむすんだ縁と縁

そでのうつりがさて忘れぬ」(十八オ) 「(白ふじ) いかうへこそでかけ香もつとめの内のかざりやぐいきちたてごとさみせんといしとのごに打つけて」いふにいはれぬむねのうちたまさかあふ夜はしみゝ嬉し「(小むらさき) ほんにしみゝうちあけていはねばすまずいへばまたやしきそだちのこのやばにまだゆゑうめのかゝのこり」そでにあまりしはづかしさ

なんほ此身があまじやといふて「(松かぜ) わらはゝわらへちつともそつともだいいじないハゝ」(十八ウ) エゝ、だいいじないものをぬれてそひねの恋ごろもそも此ほどのおん情」おもひきられる義理かいな

こがれゝてくらせばとても「かはすことのはむつまじくありしそひ麻のいもせがはうきよをわたる花いかだはなれゝゝになるとても」すへはひとつになるはいな

ねがひかなひて気もおちついて「(うすゆき) こゝろせかれてたびだちに日のよしあしもないごろもうらなきこひのま」(十九オ) ことゝいつか女夫とならざかや」はやくもちたやしんぜたい

おもや思ふほどまゝにはならぬ「(むしうり) すいなうき世のなん／＼なかをやばにくらしでまち／＼のとくぬをまはるがげどう籠なれもこひちに身をやつしごと」野べになくむし身をこがす

女こゝろのたゝトすじに「(おなつ) むりなくぜつにわしやひかされてねがひかけたるあさくさはあんがあさいとにきゝ硯」(十九ウ) ひきよせかくふみもなみだにうすきすみだ川」くろうするの親のばち

わけもしら藤はひまつはりて「(おしゆん) もとこのこひはわたしからしかけぶんこのうちあけていやたりやおまへもがてんしてねやのすまふの初まくら」しめてうれしくからむ蔓まゝにあふみはかた田のうらよ「(小いな) うきが中にもたのしみは初会にほれてうらみわびはさぬそでだにあるものをかたいたく」(二十オ) そく石山のそのつきだしのはじめから」あはづにつもりしひらの雪

あきの夜かぜが身にしみゝと「(黒木うり) いろをねがひのはなすゝきまねけばそれとおもひぐさくさかり笛にあらねどもきみがいる音にさそはれて妻こふしかのよるとだに」すへをまつ虫ねもほそく

どふあきらめてもあきらめられぬ「(三かつ) あけくれおもふていますときいてとびたつうれしさに手をあは」(二十ウ) すればその手をとりおもふことまゝならぬうきよなれ」むりなねがひもこひのよく

すがるたもとをまたふりはらひ「(伊左衛門) さりとては紙子ぎはりがあらゝひけはやぶるゝつかめばあとにしはすらう人むかしはやりがむかいに出来るいまはよう／＼なぎなたのぞうりをぬいてあみがさの中のざしきにとふりける」かはりはてたる人こゝろ

しらぬよめにわらはゝわらへ」(二十一オ) 「(かみち) ぐちなおなごにみれんなおとこよくあいはれのじつくらべよいはひぞりて夜中のくぜつないてしぎのかうがいをれてわかれのきぬゝに」ぬしとあさねがして見たい

あきのあふぎと身は捨てられて「(小まち) うらみながらもいとしさを深くさのはなすゝきつゆもおきいにわすられずこれまでまはりさむらふぞや」つらい恋ぢにくらうする

ほんにおもへばおまへとわたしや」(二十一ウ) 「(おきく幸介) そのみづぐきのふでのいのちげをしからぬこゝろのたけをかきくもりあとやさきなるふみのあや」きるにきられぬ身のつまり

つらいぐがいももう一二ねん「(高尾) じつととめきのうつりがもなつかしうはないかいなつらいぐがいは夢のうちねんがあいてのたのしみは」いまのくろうをはなしぐさ

まよふ恋路に手をひきあふて「(うめ川) いたはる身さへゆきかぜにこゝへる手さきふところへあたゝめられつあたゝ」(二十二オ) めつ石はらみちをあしびきのやまとじさしてゆくそらや木々のこずへも紅葉して」ともに落葉とふたり連

見るもねたましそれのすがた「(くらまじゝ) たれとねてきたみだれがみどこのいはとのむつごとをさかまほしやとよりそへばもとよりきやうきのうろ／＼と」なざけしらずめにくらしや

いろをあらためなかうど入て」(二十二ウ)「くはいらいし」蓬らいの鳥はめでたいしまで
のこがね升にて米はかるじやのくはかまじやのはかまよの」ト今じやまじめなふうふ中
七ツくじやかへさにやならぬ(まち人) ついてくりやるな八まんがねよかはひおとこと
いちやつきはむまいな町じやないかいな」おたなものかやせひもない

これもやくそく惚たがむりか(おはん) はじめてこわいはづかしいあとでうれしい枕して」
ねがほ見つめて肌とはだ」(二十三オ)

梅にうぐひす中よき糸にし(くはいらいし) 媒(なこご)をいれてしうげんも四海なみ風
をだやかに」家内そろふてむつまじき

ないて心でこがれてゐるに(おはや) うわきうぐひす梅をばすて、となりあるきのざれご
とに」実のないのほどがある

にくらしいほどなぜ此やうに(明がらす) あふた初手からかわいさの身にしみく」とほれ
ぬいて」こ、ろでこ、ろがぐちになる」(二十三ウ)

いやにからすが鳴てもくろう(こん八) あいた見たさはとびたばかりかこの鳥かやうら
めしや」たよりきくまで癪の種

異見いはれりやいはれるほどに(明がらす) どふした縁でかの人にあふたしよてからかは
いさに身にしみく」と惚ぬいて」おもひきられぬ恋のいぢ

金がものいふうき世のならひ(同) きのふの花はけふの夢いまはわが身につまされて」ば
かにされるが口おしい

ぶちつた、きつせつかんせうが」(二十四オ) (同) すいた男にわしや命でもなんのおしか
ろぞつゆの身のきへば恨もなきものを」これぎりあはずにあられふか

明のからすもかわいと鳴ば(おちうど) とまりくのはたごやでほんの旅寐の仮まくらう
れしい中じやないかいな」はなれがたなき肌とはだ

ふじゆがちゆへまこともしれる(同) やばないなかのくらしにははたも織候ちんしごと常
の女子といはれてもとりみだしたるしんじつが」(二十四ウ) ふうふたがひにともかせぎ

こ、ろ閑屋にひとめをしのび(おそめ) つぼみの花のふり袖も内をしのんでよふく」と
こ、でたがひのやくそくは心もほんにすみ田川) みやこどりさへめうとづれ

実もまこともつくしたあとは(おはん) あすまたぬ身の何かせてうめい寺とまたのまれ
ぬはうし嶋のうきよぞとはかなきことをかこつにぞ」なみだばかりで声もせず」(二十五

オ)
かうなるからにはわたしもげいしや(小ぎく) しかもそのとき此うちではじめてあひの手
も」ひくにひかれぬ意気ちづく

肌と肌をびつたりよせて(同) しめてむすぶのあんならでとけぬおもひとみゑのをび」

まはすつくびは襟とあり

なみだもろきは女のこ、ろ(こん八) けぶるやなぎのたばこぼんたがひに引あいかほそむ
け身をそむけたる風見草」(二十五ウ) わざとすねるとしりながら

梅にやどかるうぐひすならで(同) すいなゆかりとわれながらわがつま琴にかきならすお
もひのたけの尺八も」ひとよきりとは氣にかゝる

しのを束ねてつくよな雨に(おそめ) うちをしのんでようく」とこ、でたがひのやくそく
は心もほんにすみだ川人目づ、みの川ぎしをたどりく」きて見りやさほどのこともない

かはりやせぬぞへ若葉のみどり」(二十六オ) (小じ、う) 松のくらしいを見かへりの柳さく
らの伸の町いつしか花もちりてつとんと見せずが、きの風かほるすだれか、げてほと、ぎす

なくやさつきのあやめ草」ぬれるたびくいろをます
うれしさをふりの袂につ、めどあまる(三ばさう) 初にそいねのにいまくらかはすことば
もなんとゆてどうしてよいの口と口たがひに手さへとりかねの声がとりもちやうく」と明ゆ

くそらを月にして」(二十六ウ) くもと雨との床のう
こひしさがつもりくしわがむねのうち(？のふじ) まち人はゆかしきいろのかほよばな
見るに心もふかみぐさぬれておもひはゆきの夜も」とけてうれしきとこのうち

土手を見めぐりあれ都鳥(梅のはる) きみにあふ夜はたれしらひげのもりこへてまつちの
山といはざきの其かねがふちかねこともたのしい中じやないかいなおもしろや」(二十七

オ) めうと中よくすみだ川
けふのあつさとゆふすゞみ舟(おさん) あんのはしまであひそめてほかのおきやくはなん
のそのあきの七くさならねどもはなのいろかとそやされて」みづにあはずにあられふか

なじみかさねていとしさまさり(おはん) ほんに思へばきのふけふちいさいときからおま
へにだかれ手ならひせいといはしやんしてお手ほんかいてもろふたる」いろにいのちをちら

しがき」(二十七ウ)
しのびく」てきた山しぐれ(やよひの花) ふられてかへるはんもありそれでおやどのしゆ

びもよくとかくうき世はま、にはならぬ」ぬれてしつぱり夜の雨
むすんだゑにしがどうとかれふか(おはん) みんな女子はいつしやうに男といふはたゝひ

とり二人とはだをふれるのはどんなほんにもとしくくさぞうしにもないことをよふ見て
聞いたづらな」うき名たつのもいとやせぬ

しのびあひしはまだきのふけふ」(二十八オ) (おかる) こんな糸にしがからかみのおしの
つがひのたのしみにとまりくのはたごやでほんのたび寐の仮まくらうれしい中じやないか

いな」かけしちかひは二世三世
どんなき菊かしら菊なれど(おまつり) 初の一座のつれの内おもしろそふな口合にすいた

がいんぐはすかれたも心に二ツはないわいなそのときあいつが口ぐせに」おもひそめ井のいろふかく

三すじよすじに世はわたれども（月雪花）ゆき見に船と朝まだき」（二十八ウ）うかれがらすにおこされてねむい所をきめうとはせじとつとめにゆがへりのあしだもけがにころばずやむぎなげいしやと立とふす」こゝろひとすじ思ひつめ

はつの恋風身にしみわたり（小さん）まだかたあげの三とせ跡ふねのうちなるおなさけをわする、ひまもなまなかにませたやうでもどこやらにおさな心のあどもなふ」あけくれこがれてゐるわいな（二十九オ）

川竹の身にも立たるくがいのまこと（よしはらすめ）ねんがあくのをまちかねてやつぱりしたばとよばれたく男ゆへならたのしみにくがいうる身を立るとはぎり一ツぺんのあだつきはけつく心のもめるたね」すこしはふびんとおもはんせ

思ひつめたる気はひとすじに（喜せん）わたしやおまへの政所いつかくはほうも一もりとはめられたさの身のねがひ」（二十九ウ）千代のすへまでもしらが

恋にや貴賤の別へだてなく（せんど）ゑぞ松まへのおかたでもまたはあづまのわつちらでも心にふたつはないわいなこれもひとへにみなさまのおかけで小いも土地がらで」あだなうき名がまたうれし

三味せんの糸もみだれて只ひとすじに（京のさみだれ）じたいわたしは深川へげい子になりしはじめから店のおかたの出ばんにもよばれて一度二けんぢや」（三十オ）屋しかもそのときこのうちでぬしにはじめてあいの手も」こゝろのこまのくるひぞめ

およばぬ恋とはしりつ、惚て（袖がうら）こひのいろはをたもたらそでへたのんでい、かはし二世も三世もさきの世かけてちかひし中じやないかいな」おもひきられぬ身のいんぐわ

いさみはだかは男のきをひ（さしうり）はでなはつびのはづくろひしまのも、引はいてくりややぶかならねど」（三十ウ）さし売と見けなされてもしやちほこをにらんで生れ玉川をぎゆつとうぶやのあづまつ子」うでにやいのちのいれぼくろ

はるさめにぬれてかはかぬわがこひごろも（安な）ぬしはわすれてござんせうしかも去年さくらどきうへて初日の初会からあふての後は一日もたよりきかねばきもすまずうつら／＼と夜をあかし」そらも心もくもりがち」（三十一オ）

むりなねがひもかなふてほんに（山がへり）四ッ谷ではじめてあふたときすいたらしいと思ふたがいんぐはなゑんのいと車めぐり／＼て大山もせきそんさまのひきあはせ」うれしかろふじやないかいな

いまはたがひに手いけのはなの（くはいらいし）それとお七はうしろから見めかはゆき

水仙の初にねじめのうれしさに恋といふ字の書そめを湯しまにかけしふでつ花」咲もそろひしいろざかり」（三十一ウ）

むらくもをもれていてたるあの月さへも（玉うさぎ）ういたなもとよさんやの小ぶねこがれ／＼てかよはんせこいつはおもしろおれさまとしやれるしたよりぶつ／＼のう／＼これはもなきつ／＼ら」千ひろのそこまでうつるかげ

じつにつれない人目のせきや（江戸ざくら）恋のかなめはあふよのしゅびよそつと二かいの九ばしごすいがらの火で顔を見るはかないが恋ぞうじやいな」わかれかねの音あけがらす」（三十二オ）

ながれわたりの世は気さんじや（？）女たいふと夕立のはれまいとふてとり出す身は三味せんのかはゆらし月待日まちだいまちや其町々をかどづけも」あだな世わたりばち当りよく／＼な深いゑにしかおまへの事は（おそめ）ちいさいときからなまなかに手ならひまでも一ツとこ何やらさうしへかいたのをそなたに見せてとふたれば恋といふ字といふたのを」わする、ときはないわいな」（三十二ウ）

男ごゝろにあき風ふきて（やす秀）あだにくらしいなんじやいなおきよ所のくらまぎればんにやいのとみ、に口むべ山風のあらしほどぞつと身にしむうれしさも」いまは野ずへのかれ尾花

たとへ一ちねんあはねばととも（二人奴）そもや二人が中々は心でこがれまち明しあふて嬉しきもどりがご互ひに胸をうち明てきも合はれのすいたどしかはるまいぞと云しでのかみ／＼さんへちかひにかけ」（三十三オ）すへはめうと、なるわいな

しつぽりと降夜うれしき此さみだれに（四季さんば）きみがゆかりのいろ見ぐさうつろふみづにかきつばたいけのみぎわにつるかめのゑにしうれしきおどりばな」ぬれていろますあやめぐさ

松と竹とのよろづ代かけて（栄のはる）むすぶゑにしのもとせも命ながかけもろしらがまでかはらぬ中とむつまじ月のだて小そで」恵方まいりもめうとづれ」（三十三ウ）

○長唄

ふみじやたがひにたりない用事（あたか）笛になりたやしのおよのふへはおもひの口うつし」あふたらはなしもあとやさき

初手の気やすめまうけにうけて（江のしま）こちは姫貝ひとすぢに女ごゝろはさうじやないわいな」当座の花とはあんまりな

ひとめは、かり時たまさかに（まつ風）あふた其ときやついころびねの帯もとかいでそれなりに二人がすそへ」（三十四オ）かりぎぬをかけてぞたのむ睦言に」かはひがらすのなく

までも

いとらしいと思ふたよりも(「かむろ」)こひのたねまきそめしよりいふことばはいづれ此さとにまことこもりしひとくるはまるいせかいやすいのよに」ぐちにうらんだ神仏青柳の風にみだる、あのあらひがみ(「汝くみ」)いつかうれしきあふせもときみにやたれかつげのくし)(ママ)(三十四ウ)

気づよいおまへに心のたけを(「正札付」)やはなちからはおくの間のうはきらしさのしんきぶし女子のぐちなしんじつがとゝかぬことかまつよはもふとんかさねてきたへの枕の土ひやうけせうがみ)ゆふてしまだのもつれがみ

のほりつめたるわたしが心(「あたか」)しの、めはやくあけゆけばあさちいろづくあらち山けいのうみみや居ひさしき神ぐきやまつのきのめやまなをゆくさ(「三十五オ」)きに見へたるは)こひのとふげをこへかねる

むりなねがひのしほだち茶断(「小原女」)こひにはやせの里そだちのきのすだれのゆかしさは玉だれがみをととりあげてたれに見せうとてゆふげせう)みんなぬしへのしんぢうだてきてはちら／＼すがたを見せて(「あづま八景」)はるかあなたのほとゝぎすはつねかけたか

羽ごろもの松はてん女のたはむれを三保にたとへてするがの名あるだいのよせ(「三十五ウ」)いのいや高く見おろすきしのいかだもり)みづにくらせばあきらめる

こひにこがる、わたしのこゝろ(「ささむすめ」)えんをむすぶの神さんにとりあげられしうれしさもあるいろかのはづかしやすまのうらべで汝くむよりもきみの心はとりにくいさりととはじつにまこと、おもはんせ)ちつとはさつして見たがよい

それもおぼろに月かげさして(「まひ扇」)梅がへはるのこゝろや花のかを見せつ見られつ(「三十六オ」)その日より千代もおふせのひめにまつ三度もくどうかへすがきおもひのおくじやないかいな)まつに來ぬ夜のじれつたさ

こひのやみぢにふみまよふ身は(「も、よ車」)百夜かよへとゆふづきのかさにふるゆきつもるゆき恋のおもにとちかたけなみだのつら、とけやらぬきみのこゝろはうきよ川)よるべなきまであこがれる

見やしやんせあれ驚のかたことまじり(「三十六ウ」)(「あはしま」)きみははるさく梅の花かほりゆかしきねやの戸にはて恋じやもの小六／＼小ろくついたる竹の杖もとは尺八なかはふへ)ゆかしいねいろじやないかいな

ついちやゐられずエ、じれつたや(「けいせい道成寺」)まぶの男はついにくやだいてねたときやわれならで外の女郎にやあはぬといふてだましくさつたがくやしうてならぬ)つとめの身なればまゝならぬ

いろのいろはをかきそめてより(「京がのこ」)恋の手ならひついい見な(「三十七オ」)らひてた

れに見せふとてべにかねつきよぞみんなぬしへのしんぢうだてヲ、うれし／＼)かたときわする、ひまもない

わかれりやあふ目を又まちかねて(「よし原すゝめ」)ふみのたよりになアこよひごんすとそのうはさいつのもん日もぬしさんのやばなことじやひよく紋はなれぬ中じやとしよんがへ)そはぎやむまい此くろう

千代もかはらぬいろふかみどり(「老まつ」)まつの太夫のうちかけは(「三十七ウ」)つたのもやうにふぢいろのいとしかわいもみんな／＼男はいつはりじやものすねて見せてもそのま、よそへあるよひそかにつき合の)まつとしらぬがさよあらし

しらぬわたしにおまへの指南(「花ぐるま」)はつこひの人めはづかし花もみぢしのぶの山のしたもみぢうすいはいやよこひごろもむすぶゑにしは神さんの)おしえさんしたさゝめごといろといふ字をおほへてからに(「三十八オ」)(「とも奴二上り」)おはもじならざるかたへは

のじとれの字のなぞかけてほどかせたさの三糸のおびとけてねた夜はゆるさんせア、まゝ、ようきながどふなると)かたときあはずにゐられふか

まよふわたしに氣やすめばかり(「おかね」)こよひかた、においそのもりとへんじしがらきまたせておいてまだなことじやと心でわらひうそをつくまのあだにくらしい)みんな男はつみつくり

かたいかたため年にはませて(「三十八ウ」)(「外記さる」)これはなにはにうき名もたかきかわらばしとや油やの一人むすめにお染とて年も二八の恋ざかり内のこがいのひさ松としのび／＼にあぶらを)しめてむすびしゑんのつな

わたしやかた田のかたおもひにて(「ふぢ娘」)おとこ心のにくいのはほかの女子に神かけてあはずと三井のかねごとにもかたいちのかいの石山に身はうつせみのから崎やまつ夜をよそにひらのゆき)あはづにこがる、矢ばせぶね(「三十九オ」)

よくもそろふたふたりがゑにし(「した出しさんば」)さてこんれいの吉日はゑんをさだんの日をゑらみをくるにもついなに／＼やろなるりの手ばこにさんこのくしげたまをのべたるながもちにかずもてうどのいさぎよく)千代をことぶくまつと竹

あはぬ日はふみのたよりが心のやるせ(「門けいせい」)かけてもほんにかはるとはいふてもおくれなつく／＼とおもやつとめのうれしいゑにしこゝよりほかでぬしにいつ(「三十九ウ」)あはれぬなにかきかはすうゑ／＼様のちわぶみも)ふでの手まへも恥かしや

かはしたきせうはありやなんのため(「高砂たん前」)たとへ万里はへだつともしたふ心はそりやいわんすなあさなゆふなに空ふく風もおちばころもの袖ひきまとおおもふとのごはつれなの身にし)わたしばかりはかはりやせぬ

おとこ心はつれないものよ(「はま松風」)うらみがはにもなんにもいはずみぶのたゞ見はき

をはるみちのつらきうきみに」(四十オ) おほ江のちさとたとへどあなたが水さそうとも」おもひきられりやはればせぬ

あだし枕はつとめのならひ(「しう着じ」) あさなゆふなにつすかゞみのよい金性とわしは水性でおまへとふかいそれをうたがふことかいなさりと柳にやらしやんせ」すゑをたのむはぬしひとり

つもるはなしは又なくなたねよ(「二人わん久」) はさぬなみだのしつぱりと身にしみとゝかはゆさのそれがこうじたものぐるひとともぬれたる」(四十ウ) やみなりやこそおやのいけんもわざくれと」いまはふたりが身のつまり

むりなしゆびして人めをしのび(「汐くみ」) あふたそのときやついころび寐のをびもとかいでそれなりに二人がすそへかりぎぬをかけてぞたのむ睦言に」こゝろもとけてはだと肌

ふゑやたいこで其日をおくり(「越後じ」) うき世をわたる風雅ものうたふもまふもはやすのも一人たび寐のくさまくらおらが女房を」(四十一オ) ほめるじやないがまゝもたいたり水しごと」くれるまもなくよひまつり

もしやさうかと顔さしのぞき(「あさづま」) そりやいはいでもすまふぞへすまぬくぜつのいひが、りせなか合せの床の山こちらむかせて引よせてつめて見てもこぐ船のあだしあだなみうはきづら」しやくがとりもつ中なほり

かわい男はなせまゝならぬ(「鬼? 拍子まひ」) そういわんすりやおまへひとりがしんじつでわしが」(四十二ウ) こゝろにあるとあらゆる神かけてかはるこゝろはないものをおまへはうそとおもわんすそれでもわしやなをかわひ」しぬほどほれたが身のいんぐわ

つゆのなさけにこちやぬれそめて(「諷まつ風」) 月のくぜつかはたるのりんきもつれゝてとけかぬるきみがひと夜のなさけはつらやけつくおもひのますかゝみ今ははづかしみだれがみ」みだれ心にものおもひ

ひとり寐にうつらゝと」(四十二オ) みじか夜ふかし(「きく慈童」) 恋のいのちははつほとゝぎす月のかげさへそらなつかしき二度のあふせはしぐれのもみぢ見れば其まゝ、かほに火がたかいもひくいもいろのみち」なかなむしさへ身をこがす

きみのためとて身はやつせども(「くはんじん帳」) 人のなさけのさかづきをかけて心をとゝむとかや今はむかしのかたりぐさあらはづかしのわが心一度まみへし女さへまよひの道の関こへて今またこゝにこ」(四十二ウ) へかぬる」むねとせきとをあけかぬる

○都一中ぶし

おまへばかりが男じやないと(「あさま」) 千も二千も三千もせかいにひとりのおとこじやとたのしむ中のわかみどり」いふて心でないてゐる

雲間がくれの三日月ならで(「ゑのしま」) すがたは見せずほとゝぎすおもはせぶりは誰やらが恋のこゝろをうつせ貝」(四十三オ) ひとりくよゝものおもひ

のかずは出世のお邪魔になろう(「同」) おもはせぶりはたれやらが恋のこゝろをうつせ貝」からかびづらもほどこにをし

ちわがつのりてくぜつの果の(「よし原八景」) あらしははれてひとしぐれぬれてあふ夜は寐てから崎の」まつたかひなきあけがらす

にかいせかれてかなしさつらさ(「同」) ふけて青田にこがるゝほたるれんじまで来て蚊屋の外」(四十三ウ) なんてこんなに迷ひした

泣てわかれて又やくそくを(「けいせい」) 夜ごとにくもるとろろのきへぬはしんきともし火をけして寐たときをびひもを」むすぶゑにしのうらざしき

ばかよたはけとそしられながら(「よし原八景」) いろのもなかのすがた見もてる月なみのも人日とてやくそくかたき石山や鳩のうき寐の身ながらもあだに栗津のせいらんとこゝろでとめしゐつげに」(四十四オ) かよひ出してはやめられぬ

とても女夫になられぬならば(「黒かみ」) 所詮この世はかりわけの恋にうき身をなげしまだかくごきはめし心をばぬしになにとぞつげのくし」はやくあの世であらせたい

こゝはどことかご屋さんに聞ば(「よし原八景」) 日本一の大門口」はるかに見ゆるは秋葉さんの常とう明

ど、逸大成文句入前編了」(四十四ウ)

(広告)

東都人形町通

品川屋久助板(裏見返し)

四 『よし此はなそろへ 初編』(本屋為助版。幕末刊か)

よし此はなそろへ 初編

半水撰 貞信画(表紙)

(口絵)

貞信画(口絵)

初編之序

浮礼唄は。恋の情を種として。万の千話の花となれりけるより。色好みの作人多く。夕部に逢んことをかこちて。煙管片手に作意を案じ。旦の別れを穿ちては。袖を絞るおもひをなせり。錦木の数を尽し。千束の文の限りなき。かづゝの中を撰出して。恋人に棧を渡すこ

と、なしぬ

一 荷堂狂夫 恋々山人誌 (序)

おとこ猫でもきろふてゐるよ貞女立たいこ、ろから
人の気付き来ぬ通路付ておころもちではあるまいし
隠しかくしたおまへの事も鼠なきからさとられた
声もあわれに啼鹿よりもまつよだまつてないてゐる
余所の浮気を早尻笑ひするよおんなの猿智恵で (一オ)
お客にそろ／＼尾が見へかけて尾のない狐がにげ仕度
ほんと音信きくその上でやぶれかぶれの手負猪々
かへろ／＼といふ鹿の毛よ今に首尾する筆となる
我身わすれて人をばうらみ人がわれなら斯なかる
濡たで色けが増たと見へてそぶりかへたる雨のたけ (二ウ)
仇にくまれちやそりや遣り水もよそへ流れが附安い
まかせがゐなき野分の風とおもやす、きも苦が絶ぬ
はれていたとて身に露程はぬれに義理ある草の色
野にはすめどもアノなでし子は露のなみだのおとしみづ
濃茶挽茶と汲分かねてうつす茶碗も楽でない (二オ)
じつと切戸に伺ふ月もうかと向ふへうつすかげ
縁の糸目はしれない物よあんな人にもあんなこと
ゑんを切さぬ水がらくりもとは手くだの仕わけから
別れする身の心をしらずにくや雀のあさきげん
訳はいわぬよいわけないわけは主に覚へがあるわいな (二二ウ)
好た同士がしみ／＼ぬれて聞もうれしひ夜の雨
ほんといふたもアリヤ皆人目すゐて身上りする火花
浮気同士の口絶でしらせ南無三突出す明のかね
アレさいやだよ桜にあらし添て苦ろうをさすわいな
心ならねばこ、ろにこ、ろゆるしやせぬぞへ心から (三オ)
余所の可愛人からそんなくひ仕うちをさすにくさ
逢ぬその夜は月夜も闇よあへば闇でもはる、胸
出てる間のにごりも引て底をあかしたながれみづ
つくすしん実うつ、になつてわが身こがせる夏のむし
見附られじと引さく文のはしの当名が切にくひ (二三ウ)

まことつくしたそのかゝ有てくらしやうれしひ主の傍
おもひ過せばなにかに付て愚ちが怪きの種となる
夢に見てさへ嬉しくおもやあふた其よはどふあろう
又しても又迷ふたふりがあつて人にもまよはせる
かなしい中にも又楽しみがかへつて苦勞の種となる (四オ)
ほんに嬉しき夢見しあとはものつらさにかへる床
仇になるほど苦をさす主がなぜにこれほど可愛かる
ほんに是から咲朝顔の花を見捨てかへるぬし
蝙蝠羽織で日のくれがたに軒を通るも当があら
あふて嬉しい此四ツ足は親にや畜生といはれても (四ウ)
うき名高砂幾千代迄もみさを立ぬく松のいろ
人目忍び緒ソイ悟られてばつと浮名の龍がしら
露と縁にしを結んだ草もひよんなあらしでくろうする
隠す程なを浮名が高ふなつて悟れぬ身のせつば
見付られては浮名のはしとそつとうらはへしのお露 (五オ)
今朝はにつこり笑顔をふくみ深い色もつ紅の花
何はともあれ今宵の首尾とあへばあしたを又あなじ
起証せいしも今では反古切た小ゆびが馬からしい
ぬれるつもりのある其夜さは月も傘きてしのぶ影
風がそは付やツイ落されて木のはまぐらのその、梅 (五ウ)
露の一夜で咲たるはなにぬれて出かける蝶も有
松に馴染の月さへそはにや露も苦ろうはせぬ物に
たま／＼にあふてうれしく思もはれて月のかほ見る入梅の雨
風のわるさを誠にうけて雪とわかれを仕たる竹
便り百歩のうれしさよりもあふて一步の無理がよる (六オ)
起りや面かげ目にちら／＼と寐ては夢見る恋やつれ
うたがはれたる村雲はれてうれしなきする蟬のこゑ
花の実意を見ながら蝶がかきの外からうはきする
人目いたふかこつそりかげで花を咲せる雪のした
投る翁を程よふのせて蝶もころりと横に寐る (六ウ)
鳴かならぬかアノ小つゝみは手ぎはこなしの上手下手
主がわしほど実あるならばこうもくろうはせぬ物を

しのおそののやくそく事もあけていわれぬつま戸ぐち
雨やあらしのもめさへなくばしかと実を持やぶ椿

出世じまんの張拔鯉も風にくろうをするはるな」(七オ)

泣てうれしひ夜はたまさかであはず恨の夜がお、ゐ

どふか水上でけたと見へて床に色よき花しやうぶ

風の悪性に吹落さりよが二ばはなれぬ青松葉

初手の手管も忘れて今はなぜに此苦がしたいやら

あふたその夜の身にしみゝと粋な夜風に神風よ」(七ウ)

はれたやうでもまたもやついて心くもらす入梅の雨

梅も実持となりや鶯もいつかくるいがやむわいな

今朝のわかれと恨にかへておそいかへりをあんじたい

川をへだて、ふつたる雪もとけりやひとつに成はいな

濡が重りやしはれた振でしんのいろけをもつ柳」(八オ)

いふもはづかし身はかづならずじやとて思ひは猶されず

ふかふなる程くろうの種と水にきをもむ築の杭

花にやつれなひアノ春雨にぬれて色増庭のこけ

人目しのんでよい首尾なれど又も邪まする螢の火

水になるとは明らめながら目さきうれしひ今朝の雪」(八ウ)

風がりんきでわかれし蝶もこ、ろのこりかもとの草

あはぬつらさの涙の露をあふよことばの花におく

落て木のはのざこねをにくみ風もりんきでそ、のかす

うき身やつして螢も恋にや人をむやみにそ引だす

あへぬ其夜に月夜も闇となつてしんきな胸のうち」(九オ)

うその種から咲たる花にやうかとこ、ろもおけぬ露

草も夜ごとに濡重りてしんの色もつつゆのうち

どこへ宿りも定めぬ月が水におもひの氣をうつす

咲ばあらしを苦にするくせに咲ぬさくらを待びる

逃る手元を程よく抜て忍ぶ闇路へとぶほたる」(九ウ)

こがれいる身はあふ其よ迄忘りやせぬぞへ見た夢も

うれしはつ夢主よりはかにいふてきかせる人がなひ

いわぬ心が月日にましてあふたその夜もしんき勝

かねはつき出すとけぬは霜よ口ぜつしらけた朝戻り

主にあふよと雪見の朝はつるおもひにきがせける」(十オ)

義理でへだてのある水引はかたふ結んだいろという

落た所から木のはの色をとめて氷がうごかさぬ

色け捨てもアノしほ鯛にそふたいわしの果ほう者

主に三あかし四め五になると一め二めはそらす羽ね

年のはかれどかわらぬやうとおもひざした鶴のはね」(十ウ)

主の眼もとの汐路に引れわたしや深みへはまるまで

尻の居らぬこの金まらはおさへつけても寐ない筈

乗たはなしにしん実ほれたなぞとホイ駕頼むこし

はれて添日にや人眼も有が鏡もちさへ薄げしやう

当ざ計りで通はぬ風にやのほしがぬなく落る風」(十一オ)

はれたからだよ口ぐるまとはしりつ、乗ぞめしてみたい

花の浮氣に蝶さへなんの尻のすはろう筈はなひ

うはべばかりに色見せかけてしんに実のないかざりゑび

はるにあふてもまた初若な色の諸わけもない二ば

すげのふ返して跡では一人義理となさけにせまる胸」(十一ウ)

明てさつぱり氣は変るともまことかはらぬ好た同士

ちよつと人目は切たと見せてこ、ろつながらはつがすみ

日ごと顔見にや済ないけれどましてうれしひはつ日の出

礼義立はるこ、ろのま、にうれしあふよを松の内

あふた所でかたぬげなぞとそんなさむしい氣はもたぬ」(十二オ)

うそも誠もみな打明て主の手くだにまかれこむ

胸迄合してそふかけ鯛がにらみあふとは氣がしれん

春の水は身うすいからよ手だしするきも無わいな

好た揚先日はおなじことこ、ろふたつに身はひとつ

ながいくろうも只一夜さに捨てうれしく向ふはる」(十二ウ)

りんきするのものはれ過たからほどを忘れて愚計り

あふた夢なら覚ては又も逢ぬしんきが猶まさる

つきがわるいの色黒じやのとわたしや米やじや無はいな

いやでも別れぬ人さへあるになぜにわかれにやならぬとは

月の明りがいとにくらしふなるも心のくもりから」(十三オ)

いとしかあいがこの身に余りおもひやりさへ夢になる

人の目につきや此身の仇とかげで茗荷も花さかす

いつそあはれにや今さらこんなくろうしもせずさしめせず

書た去状もいつしかわすれよつてくだんの逢もどり

浅いわたしよこゝろで深ふおしむいのちじやないわいな(十三ウ)

仕ている者より見ている人が泣いたり笑たりする芝居

味にほれたら雨だれ落もこいし小石があらはれる

ひねらるゝ手先握てひねつて返す千草結で迷ふ胸

結ぶ糸にしを頼みし神に今さら切とは言いやうか

すこしなりとも便があらばこゝろうれしひ夏の風(十四オ)

嘘で丸めたつとめもけさは実にかへさにやならぬ訳

にくやお前の嘘八百が四百四病の癪になる

狂いだしてはアノ猫でさへ内に寐る夜はないわいな

のくの退ぬのこのくるしさはみだれごゝろの狐つき

あらぎも取れた私や熊の皮尻に引れて日を送る(十四ウ)

土氣放れりやくろうを寛松の蟬さへ啼どふし

おもふ心を壁にも耳があらば言ずにしらせたい

うらみいふたり又言れたりするも互ひの楽しみか

たまに首尾すりやこの短夜でしばし待間もやるせなひ

花や色香のうはきを捨て今は苦ろうな種あぶら(十五オ)

ひよんな手くだにみに乗られて退にのかれぬ網の鳥

あわぬ其よはすげない蚊もともになくから寐付れぬ

忍ぶ相づを待くらすみはながいおもひよ夏のよも

ほんに今では土氣もはなれ身拔しられた蟬のから

命あつての物だねじやとてすきなおまへにかへられぬ(十五ウ)

結ぶ思ひの参らせ候になぜかかしくをはねるやら

文でわたしの思ひがとゞきやあはぬうらみはないわいな

仇な朝がほ根もない竹にからみ付きはどふあろう

忍びあふ夜に情といのちかへて別るゝ深いなか

隠し所のないこのふみはいつそひつじにくわしたい(十六オ)

おもひこんだる男にそへりやらくだと浮名に立とても

俤にならない身は首かせのきるも切なひつなぎざる

恋に狂ふた心の駒も千里へだてのひとはしり

悪性男と張子のとらはうなづく計りで舌をだす

主はこぬはづ文かく筆の毛さへかへろとないた鹿(十六ウ)

(広告)

万本類絵草紙おろし所

大坂 本屋為助板(裏見返し)

五 『よし此はなそろへ 式編』(本屋為助版。幕末刊か)

よし此はなそろへ 式編

半水撰 貞信画(表紙)

(口絵)

(口絵)

二編序

嚮に唱歌初編を出せしに。仇文句の心いきと具に嬉しく。彼情人にあらねども。欲はり切た書房の。笑顔ながらに二編のさゝぬそくすねて見度はおもへども。それでは心が変かと。兎角世話のやる瀬なく。筆にまかせて書あつめ。そつと当がふことなりかし

半水漁人(序)

嘘とおもへどアノひとことがもしやゝときをもたす

百部一だようらみはいへどくをしたほどには言りやせん

あわぬつらさにけふ此頃はろくしき夜の目も合ぬ胸

男嫌のひとすじ者と極意かくしておんなだて

せつない別をする明がたはぬらす互ひの四つのそで(二オ)

二の足ふむ様なやはでは無よなぞとのろけている男

にくや鼯に道切されて極たしあんも跡もどり

うはきながらの摺鉢こかしどこで重る事じややら

又も色もつアノ春草も根から切てはないゆゑに

なじみ重りや鳥さへ梅にとまりつゝけているわいな(二ウ)

残る雪はどくろがまして深くなるほどけにくる

添て間がなきや小鳥も好のうめにはづかしそふな振

座敷住居の梅にも鳥が人目しのんで逢にくる

鏡のくもりはすつぱりはれてむねのくもりははれにくひ

梅にくる鳥アレにくらしひ声を合すも障子こし(二二オ)

見すてられてはくろうも今にのこる雪さへやせてくる
 主はあら櫛わしやすきぐしよ解てゆいたい胸のうち
 乗つ一乗られしてホイ駕の色はうはきな事ばかり
 好た当さは言そ、くれてくしに苦勞をさすわいな
 風に添寐のやなぎも今はくちた所にむしがつく」(二ウ)
 ちよつと結んだ縁から今はうれしつばきにそふ柳
 木に餅のなつた様にも言れて又も二度のつとめのさし柳
 乗てもらふた此ホイかこの御札がへしは乗てから
 櫛のむねほど私がむねをすかして見せたい人がある
 柳も風がなびいていれば月にすぎないもたせぶり」(三オ)
 ひよんな風から止つて今は風もやなぎに身を任す
 つとめする身と風呂やの櫛はぬれたながらに別する
 雨にわかれた柳としらずまたもあらしが添かける
 浅きながらに程よい色と人にすかれた秋田ぐし
 好たおかたにもらふたなれど秋た櫛とはきにかゝる」(三ウ)
 すいていれどもまた新ぐしのどこか肌にはそひにくぬ
 なでつけぐしさへけふ此頃は通りかねたるもつれがみ
 ぬしに引してアレほぬかごにはしるこの身はおそろしい
 風がさはればかむりをふれど雨にや柳もそふこゝろ
 初手はうはきにツイさし柳今じやもつて手をしめる」(四オ)
 夜ごと日ごとにさしたる柳くもりやいやきがでてくる
 はでな姿で人目をつゝみ添たホイかごにくらしひ
 すかん風にもほどよくそふて乱れぬ柳の根はかたい
 千話にもつれて折れた櫛をのけて口説の種にする
 ホイ駕に人め？し乗てはいれど胸にせつないおもひ事」(四ウ)
 はれていながらもつれが有か山もかすみの帯とかぬ
 引ぬ三味にもツイ手をかけて見るもお前の口ほどき
 あふたからにはねさしてなるか夢も見ぬ夜がいく度か
 添たやうでもゆだんがならぬ薄いかすみは退きやすい
 ざりが重りや此三味せんもいつか枕にせにやならぬ」(五オ)
 ひつかう蛙に鳴くどかれてぬれにや戻れぬ訳になる
 ねられぬつらさにエ、腹の立まくら紙さへそひにくぬ

宵にや枕も並たけれどちわのもつれでどこへやら
 三味線次づにそのまゝをいてはなしつぎ出す人にあふ
 二子山さへ霞がかゝりやそふた中にもへだてする」(五ウ)
 ね間でなじみを重はすれど昼はまくらもかげのもの
 ふつともれたるアノ水調子ひよんなぼんのも三味のはざ
 さはりつくとはよい辻うらよんなやつれた三味にまで
 霞こゝろに見通し付ず色にやとめども無はいな
 水にくらして浮き草としらず蛙が添ねする」(六オ)
 身請しられた当さは風もすへにあかれる色でない
 一日二日と氣も打とけて花にほよい鳥がくる
 花がとめたる雫にふつとぬれて見かけた朝の蝶
 花もしつぽりアノはる雨にぬれが過てはちりかゝる
 別れさすのもよりそふいかも実と悪性な風しだひ」(六ウ)
 花を咲せと身をつくられてすかん庭にもつく植木
 いやなアノ木に引れた袖とたもとしめらすおわり風
 添たなののがいやきになつて余所の花へとかよふ蝶
 苦勞仕つくし咲した花にすかんあらしが添わいな
 風のそばへとアレきをはつてあへばくだけの日の廻り」(七オ)
 草と中よゐつがひの蝶も雨の一日にやくろうする
 添ねする木に濡色みへてとまりかねたるくれの蝶
 あたりさはりに皆なぶられていやなふりする野べの花
 床の花をばモフ倦はて、余所の花見にゆかんすか
 ゑよう余にかこいの花が身もちわるふに咲わいな」(七ウ)
 花の縁とはそりや水くさいわたしや老木のすへまでも
 かむり降のもうなづく風もゑんの糸目の付ぐあひ
 わしとお前はな種に蝶よほかの花にはきがのらぬ
 人にあかれる色目とならば花もいつしかちり仕たく
 風がてひどく当るに付て便ないぞへ昏鷹の糸」(八オ)
 ゑんにつながる糸にも別れ仇にあかした夜の風
 噂してさへきがそはつて花ゆへこゝろも落つかぬ
 花に氣づよる曇りが有か月も朧にはれぬいろ
 風じやないぞへわたしが恋は愛されるほどやつれだす

風にてづよく当付られてふるい声なる破れいか(八ウ)

くるわそ立の花引されて世帯じゆんだる木のそ振

仇な色目は人めに見せて主と定た閨のはな

水に影ひく一羽の蝶もしらずそばへて濡す袖

散かちらぬか噂の花にあんじさすよな風がふく

どふか落そとするアノ風をいやと風さへかむりふる(九オ)

にくひ鐘からさし込癪でしばし別れをとゞむ朝

のぼせ性かや鼓も紙をはつていながらつとめする

誠なりやこそ夜明の鐘をうらめど返さぬ事はなひ

ひよん所から日和がそれて袖をぬらした尾張風

にくや邪魔する朝鮮風め早く糸目が切りやよる(九ウ)

明の鐘でもわしや返しやせぬ幾夜首尾した此あふせ

エ、腹の立糸さくらめととゞきそふでも手がたらぬ

あふて別をおしむはいやよ雁も一度はかへるもの

しなだれあふたはきにきが廻こ、ろまよはす糸さくら

いたづら物だよ隣でそつと花をさかした糸さくら(十オ)

にくや月迄かすめて置てそつと夜の間にかへる雁

おもふ様にはならないつゞみそれ又間拍子わるいから

浮気な風が又そふゆへにみだれがちなる糸さくら

かむりふる風アレ無理やりにあげりやよそへはとまるはづ

とけて仕舞にやかへしはせんとつま戸とぢたる今朝の雪(十ウ)

にくるゝといふたも絶て今はうれしひことばかり

帰り咲する花にもふつと結び付たる蜘蛛のいと

雪の化粧にツイだまされてまたも見あかぬ宵の月

頼みがぬなきお前といふもわたしがくろうのたらぬから

墨で書ても雪ならゆきよ反古にやさ、ぬよ文の面(十一オ)

あめのなさけも花には仇よ咲た盛りをちるなみだ

愚知をいふたりけんくはをしても返しやあいとふ成はいな

いふもいわれぬ情と義理でせつな心を眼でしらす

朝はあきらめかへしはしたがその日のくる、を待わいな

あふて間もなく別とおもやほんにはかなひけさの霜(十一ウ)

姉を残してもとを先へ手だす出さんの三つ重ね

憎や人眼はすげないやうに見せてなさけの深い中

起証誓紙もなんにも入ぬつれて出より行ふなり

霜月朔日氏神まつりいづものはなしが聞たさに

夢にあふてもあふたと思やこ、ろ頼みになるわいな(十二オ)

浮きな風にもちるよな花よ頼みにおもふていらりやせん

しん実に止て置たいお前じやけれどるすとかへした胸の内

名残おしげに一声はつと啼てしらせる春の雁

たまにあふよは気が先走り情わすれてすてことば

とゐた白粉此うはみづがなさけかけたで捨にくひ(十二ウ)

かへるおもひにわかれのたねとむらさき残した爪のあと

わけもないのに訳あるやうにりんきするのがなさけない

行もかへるも一すじ道を迷ふわたしのみのいんぐは

森の木のはもツイ散果てたのみがぬなき?(かんこ)どり

当ざ計で底水くさゐつもる夜はない春の雪(十三オ)

鷺をからすとい、くろめてもゆきの足あとかくされぬ

先がきたのか心がゆくかおもふおまへに夢であふ

あふて戻りはなみだに袖をぬらすたとも片だより

重ね着て出て裸に成て雪と添ねの今年竹

ふればこぬかとうらんだゆきも積りや嬉しくはなされぬ(十三ウ)

すねる枝にも一しほ愛がでて程よく雪化粧

恋にこがれてゆく其よさはあしも心も地につかぬ

積る程なを苦勞のもと、しなだれかけたる雪の竹

主の帰りの遅さにわたしやかにんぶくろのつぎしごと

はれたつみならあんまの帳に二人づれじやと書れたひ(十四オ)

かきつばたでも手活とならばねにはもたなひにこり水

口絶の山々い、たひ事もいへずみじかひ夜のつらさ

そはせて見せたひぼたんの花に蝶も悪性な風うらむ

一こへで余りつれないアノ時鳥それじや心にたんのうせぬ

たつた一日でせけんへばつとうきな立たる八日ばな(十四ウ)

忘れられぬよたゝ一こへ?耳に残つたほと、ぎす

筑摩祭を苦にする様な事でおもひが逐られよか

千事に迷はたるの火さへそれであかりが立かねる

さはり手もないばらの木にもじせつなりやこそ花がさく

夜通しいちづてねさゝず置てうま(?)それたる憎い蚤(十五オ)

振はませてはまだわかいかいで鹿のかあいゝこゑしらす

泥でぞ立た杜若さゑ見上られたる床のうち

柳ごしでもふとつてくれれば風もさばきがつかぬ筈

廻り仕ながら顔さへろくに見ずに隠してゆく日傘

あわにや恨まぬ此短よをあふてうらんで明したひ(十五ウ)

すねたぼたんをなぶらんすきかそんな花でもごんすまひ

内の小ゆびをそうこはがつて切た小ゆびのかみがなひ

起しやうせいしはよし、ずとも書ほど誠があらばよひ

苦がひ放れて二人がはなしないたむかしをはらふいま

誰におしへてもろたもなしになませ覚へてするくろふ(十六オ)

おもふ恨みもいゝ、そゝくて今さらうらみも言にくひ

誠あかせどかなしやつとめおやをうらもふ外はなひ

浮きな主には恨もなくおんなどうしにあるうらみ

申残すと文にはかけどあふて顔見りや言いやせぬ

うそをつとめにしん実惚て誠のつとめがつとまらぬ(十六ウ)

(広告)

絵草紙仕入所

大阪心斎橋通八幡筋北へ入

本屋為助板(裏見返し)

六 『大新板よしこのさはり入』

(本屋安兵衛版。幕末刊か)

大新板よしこのさはり入

貞信画(表紙)

小信筆(口絵)

貞信(口絵)

佐和利都々一の義も暫く中絶に及びしが此度書肆が見出しに預り嗚呼がま敷も蛇にさへ応ぜぬ盲の雛のぞき春の夕の徒然に硯の海もはしやきて筆の命毛縮む程傾く首は明がたの月のかつらにあらねども其おりゝの淋しさの闇の伽にもなりつらんと云も作者の得手勝手なぞと

軍光うやまつてもうす(序)

ながい其夜もみちに明し(「忠臣ぐら三だんめ」)ひがしがしらむよこ雲にねぐらはなれてとぶからす(「けさは鳥さへうらめしい」(一オ)

ぬしのことを何そむきましよ(「かゞみ山」)憚りながらよいようにおさしづたのみ上升とやなぎながしのしなやかに(「しらす目もとのあいらしさ」(一ウ)

ぬしのまことを聞度々に(「かゞみ山長つほね」)成人の此わしをいとしがつてござる其中へかゝる嘆きを聞いたら何と身も世も有ふかと)あとはことばも泣ばかり(「二オ」)

いふてかへらぬくり言ながら(「忠臣ぐら四だんめ」)さてもゝものゝ、ふの身の上ほどはかないものが有べきかいまのまの御さいごに(「いわぬつらさはなをまさる」(二ウ)

かどにきよろりとぬしまつよさは(「忠しんぐら五だんめ」)向ふよりくる小灯燈是もむかしは弓張のともし火けさじぬらさじと)いだきついたるかをとかを(「三オ」)

いまさらかへらぬ事とはしれど(「志渡守」)て、御がこの世にござるなら馬のけいこよがくもんよと座敷の内もをてぐるまむばも衣裳を着かざつて一寸出るにもかち若党び、しいげうれつ有べきに)ほんにわたしはひとりぼし(「三ウ」)

かくしとふてももうかくされぬ(「質店」)此はらおびは何事ぞとふから様子しつたゆへたびゝのこはいけんで、御のみゝへ入まいと)むりにしりつゝ、かみだのみ(「四オ」)

ひろい世かに生れた身でも(「忠臣蔵六段目」)さてもゝ世の中におれがよふないんぐわな者がまたとふたり有べきか)せまるおもひのむねのうち(「四ウ」)

くちとこゝろはみなうらはらよ(「太功記十段目」)かなしさかくすわらひがを随分おてがら高名してせめて今宵はがいぢんをと)たゝみたゝ、いてくどきこと(「五オ」)

ひろいせかいに一人をまもり(「同十段目」)おくゝ二世をむすぶのまくらさへかはす間もなく此よふな悲しい別れをする事が)神もごぞんじないかいな(「五ウ」)

あだや浮気ではれらりよものか(「朝顔日記宿やの段」)恋ゆへこゝろつくし琴誰かは憂をとひ吟の糸より細きゆびさきにさすつめさへも八はしの)ならすしらべもぬしのうた(「六オ」)

しんていづくならまだこのうへに(「同大井川の段」)ひれふる山のかなしみも身にくらべては数ならず三千世界をたづねても)わしにうへこすものはない(「六ウ」)

ぬしのはさがよみぢのさわり(「矢口の渡し」)しぬる此身はいとはねどあとに残つたおまへの身のうへあんじ過しがしられると)まことあかしたつまをもひ(「七オ」)

どんないけんも徒には聞ぬ(「をびや」)おやの慈悲心身にこたへさしうつむいたる夫のそばいわんとすれどむねふさがり)わしもその気でいるわいな(「七ウ」)

わたしやりんきで夜の目も合ず(「かさね土ばし」)引まはしゝゝひきまはされてうたかたひめ)われとわがでにぢごくゆき(「八オ」)

どふでいろ／＼うはさもたとう (七条川原) 人が云ならいひけしてお前の子じやと云ておいて下されや夫ばかりをたのみます」 おがむわいなとしやくりなき」 (八ウ)

ぬしの戻りをまつかひもなう (梅よし) 入相のかね諸とも命取る、長吉が夏の虫かや燈火の」 かげもかたちもわかりやせん」 (九オ)

おやのこ、ろは子はおもはずに (安達さいもん) ちく生の様なはらから見事いぬねこも産おらずむまれおちるとこじきさす子は、なんで利口なものじやや」 (九ウ)

かたとき逢ねば氣もさんらんと (安達) 立上つてはいこま様のいふ／＼わしや今きられてしぬわいのふ」 是ほど恋しう成ものか」 (十オ)

世にはよふにたたとへもあるに (五ツかり金) 人にやほねどなにはれておなじ名をきくたび／＼に」 目にはなみだのたまきしげ」 (十ウ)

もつたいないとはわしやしりつ、も (野崎) くはんおんさまをかこつけに合にきたやら南や」 すぎなふいうのほがある」 (十一オ)

りんきする氣はわしやないけれど (若い女中のねいり端殊にまくらも二ツあり定めて夜伽の人ならん) 見れば云ずにおかりやうか」 (十一ウ)

どふかかふかとあんにていたに (ろう内の段) よふいきていくださつてち、をはいするありがたさよこへもおしまぬうれしなき」 はなれらりやうかこまで」 (十二オ)

やつれはて、も根は侍よ (信仰記) よしする様の御公達たとへ敵のとりこと成刃の下になをる共みれんなさいごあそばすなへ」 わるふおもふていわりようか」 (十二ウ)

こ、にいれどもいとともいへず (安達さいもん) 此かき一重がくるがねの門より高ふ心から泣こへさへもはかりて」 我と世けんをせもふする」 (十三オ)

いかに私がつとめの身でも (あこや) まだそれでもうたがひはれずはハテいつまでもせめられうわいなア」 みんなおまへのをためなら」 (十三ウ)

わたしや一図におまへがだいじ (千両のほり) いの神さま仏さま妙見さまへ精進ももどらしやんして顔見るまで」 茶だち塩だち朝まいり」 (十四オ)

とかく私が氣にいらぬやら (忠臣講釈七ツ目) さほどつれないおまへでも此子がおやじやと思へばこそまいばんねつのうはこにも」 思ひわする、ひまはない」 (十四ウ)

すねたおつとのそばはなれずに (大功記杉の森) わがつまのふとおしうごかし尽ぬなごりの百千劫こへをかぎりに泣さけぶ」 しょせんかなわぬ身のねがひ」 (十五オ)

ぐちな奴じやと笑はんしても (忠臣講釈八ツ目) かを見てなんところさうあんじたほうさうもしたものをいかにおつとのためじやとて」 うきめ見よとおもやせん」 (十五ウ)

ぬしのじついがわたしの身には (あこぎのうら) ざばへんじやくのはいざいで吞より尊いこの良薬いか成おもき病でもほんぶくせいでなんとしやう」 うれし／＼ざんすしみ／＼と」

(十六オ)

なんの私に氣がねがいろ (蝶八) アノ姉さんのもつたないかう成行もさきの世の定まり事とあきらめても」 ぐちにからまるなけなき」 (十六ウ)

(広告)

万本類絵草紙おろし所

大坂道頓堀日本橋南詰東江入

本屋安兵衛板」 (裏見返し)

七 『花揃へ』 (元治元年。河内屋佐助版。

表紙には「言ぬ色 三篇」とあるが、

上田市立図書館花月文庫本

『いはぬ色 三篇』と内容が異なるので、序題を採った。

言ぬ色 三篇」 (表紙)

花揃へ序

恋は心の実をいはぬ色鳥に現し弁茶ら鳥は腹毛の黒きとしられ白鷺の齒を出せば鴨の青首にせられ赤介鳥も黄鳥の声をふるひ殺し文句を艶ふしに遣らかせば影向ありし天津乙女もコイツ一ばんと」 (見返し) 羽衣をぶこころし身よりすとは愚なり類伽鳥の卵の中より声を出して大鵬の羽根ひろく求給へと熊鷹爪のよくばりて請願よしをすめのはや／＼くちやさへづるになむ

風瓢樓 簾々散人述」 (序)

絵」 (口絵)

絵」 (口絵)

のろけからうそしらずにうぬばれだして間夫の氣どりはつらくひ

おかしやれしやれ」 (口絵ウ)

女大学つく／＼ながめ主へこのよにつとめたい

かへす車に見送る月も遠ざかるほど不破と成

逢ば元よりうれしけれど別れおもへばなみだだね

浅ひこ、ろに折れはせぬ？はなも谷間にかくれ咲」 (二オ)

膝にもたれてほろりと涙ほんに勤めの身ならず (？)

垣の花でも由断はならぬおりにや胡蝶があひにくる

花を見て来て此うつりがはなんと桜がいひました
憎いうつり香おまへが折た梅に眼はながあるはいな
月のかげからさそふて出たか閨をもれたるわが浮名」(二ウ)

あけていはれぬ心の蓋に落るなみだの玉櫛寄
たしなまされても惚(ほれた)がよはみ素人まざりの愚痴もだす

木工のわれたる妻戸の外にすんだ顔してしのお月

間夫とお客に身は傀儡師鬼も仏も気から出る」(二オ)

雪の古市それでも通ふどうぞこよひは間の山

野暮な男といはれておくれ粋がわたしの身の苦勞

しんの鬼めにたき附られて「二ツのみにからまされこの身はいかなるむくひぞと」我とわがてに火の車

憂もつらいも心にこめて人にかたらぬ我おもひ」(二ウ)

合こゝの手は大ざしき勝負つけるは床の内

お客いなして出したる舌をすぐにおまへに吸せたい

紋は客への義理ゆへ附て主とそふ氣の陰日南

花は遠目と思ふてゐてに傍で見るほど美人草

惚たお客にややうすもいらぬ酒を呑ものことほり」(三オ)

花の下紐おまへにとかれ早ふ抱たいさくらぼん

雪が降かと空うちながめ「ヲヤばかりしうつもりいしたよ」なぞと帰へさぬ下こゝろ

千代とつまみ菜うかしにされておだて汁とはどうよくな

起証かくのも三下り半も同じ半紙のうらおもて」(三ウ)

笑ひながらの勤はいやよなかすおまへの無理が好

人目あるゆへすげなく帰しあとはつく／＼目になみだ

秘密あかしてきを動かさめふみの文句のかなしぱり

間夫の氣取はそりや粋が川浅ふわたつて深はまり

たまに來ながらもういなんすか逢に來たとはそりやたれに」(四オ)

主の言葉がたゞしはじつか人の噂がまことやら

あへぬ恨にせめてはかうと起て喰付夜着の袖

こんな雪にもかへさにやならぬなせにお前にや内がある

廊下はる／＼障子をあけて「ヲヤぬしやア寐なんしたか」ほんに氣をもむ甲斐もなふ

人は知らねど羽おりのひもよつまんだぬしの胸にある」(四ウ)

今朝の別もこの降雪にちよつと二の足ふんで見る

けふよ明日よといひのべ鏡見へぬ筈だようらじやもの
日がら約束どんちやんつかし内はてんてこもん日まへ
客？寐しなに禪をしめてわしにせりふがあるとやら」(五オ)

袖にか、つて來た提燈のふれどくさりの切ぬゑん

あ、も辛氣な今行など、いふて待せた長廊下

くらひ云分するゆへかほが赤くなるのもぬしゆへに

わしの云事ちつとお聞んかそじやとよい子にしてあげる

思ひ切れぬがそなたの花よ帰りかけてはとまるちやう」(五ウ)

消たともし火おりよき風に縁をむすぶの紙搜す

首尾をしらすする急の文にくや氷のはるすゞり

深山そだちのつゝ、じの花も咲ば指さす人がある

摺鉢をかせとじれたいおきやくの無理よ「馬鹿らしいまたすりこ木でおつ、けやアがる」それ

で苦勞をするわいな」(六オ)

なんば日蔭にそだつて居ても時節さへまちや開く花

去狀片手にかゝみにむかひこれじやおまへの無理はない

親の異見もきこへぬわいな遊ぶ処であそぶのに

辛氣ばらしにひく三味せんの糸が切れたで又ふさぐ

りんき片手にする針仕事主に仕つけのこゝろもち」(六ウ)

心棹だけとゝかぬはづよぬしはうは氣の空じや者

きかぬ顔してもものをいわず猿のまねかへ目もとぢて

いはぬ色から出來たる事を言てきるとはばからしい

通ふ闇路が何こはかるふ親の眼玉がでるじやなし」(七オ)

男らしうは書てはやれど実は涙ですつたすみ

冥加ない程おきやくの真とこれが間夫なら泣はせぬ

來ぬ夜かぞへる扇の骨？ぬしがわたしを置わすれ

いつそ斯なりやまくらもいらぬ逢ばこゝろにひとつ夜着

たち？さくら

主の相図の唱歌(はうた)はきけどあふむがへしも籠の中」(七ウ)

金にやはれねど氣立にはれたやぶれ畳も玉の床

人にやいはれず主侍夜半はむねの板屋をもる、月

勤めして、もおまへのほかは男狎さへだきはせぬ

そつとのぞいた鏡の中にかほを重ねて笑ひあふ

花が咲やらけふこのごろはぬしの心が?を散る」(八オ)
 じつも情もしり合からは今は互に末の事

あれさおはなし?いやわたしや好なはお正月
 ならべ立たる格子のかみあだな夕顔鼻くらべ

すゝみはづして二人がそつと首尾もよしの出合茶や」(八ウ)

しらぬといひけしの花落た覚えのないわたし

思ひ直して又た、みざん合はぬつらさを忍び泣

鏡のぞけばわたしの顔でふたはあなたの生写し

恋も反古にしられし文の紙魚と成ても付まどふ

千々の宝にかへてもほしやしのびあふ夜のかくれ笠」(九オ)

ちよつとお放し此かんざしの?がらなるわいな

舌が抜たいおまへの嘘はふるい鑊で喰やせねど

月の顔よりつれないおまへのやまに

?しさんすなわたりが月影さへいれはせぬ」(九ウ)

たとへ此ま、死ふとま、よ背中へまはした手はとらぬ

人にいはれぬ切戸の音は胸にあたりし雪つぶて

出しにつかふた氏子のお前祇園さんまでか、り合

磔で合つに飛石つたひそに居てかと月明り」(十オ)

迷ひ?じやと立待月をそしりや畳に影がさす

愚痴な事じやがお前のことをほめるおかたが気にかゝる

ぬしの合図のアノ雪車唄(そりうた)はこよひ小千谷の国なまり

思ひくたふれついうた、寐の「おびもとかずにそのまゝでふたりがすそにかりぎぬをかけて

ぞたのむ睦ごとの」さめてくやしき主の夢」(十ウ)

うたがひ過して腹立さしてかへすあとからわびの文

覚えない事きめ附られて袖になみだのかたがつく

来ぬ夜松風音しづまりて今はあるにもあらぬ釜

主はおうちのアノお嫁ごにさぞやこの様におしである

おつな涙を両手へうけてこんな小玉がもらひたい」(十一オ)

知らせたい気を唱歌にしらべ飛ばす琴柱の雁のつて

つとめする身は木槿の花よ其日ノのさき次第

いやな客じやと辻占聞ば枝のかわづがふれノ」と

とまゝ二階が連理の枝よしとも枕はひよくもん」(十一ウ)

恋にやむ目としらぬが仏柳谷でもなほりやせん

またのあふせと別る、雁の背中をたゝきし春の雨

しのぶ身勝手月をばうらむねは何ゆへ真のやみ

はづかしい事おなこの口で嘘やじやらけでいふ物か

にくや鼠があふ文ひいて主の名まへと寐るである」(十二オ)

わしを待のかアノ立すがたこちらむかそと雪つぶて

これさ待なよしいては留ぬ鳥渡わかれのつぎ、せる

腹を立すとよく思てお?あんなまぬけに誰がまあ

真のはなしが皆もれそうでどふもこたへぬ籠まくら

りんきしたのはわたしが悪いじやとてこの様な文じや物」(十二ウ)

(広告)

元治元子初夏

玉淵堂

心齋橋伝馬町角

河内屋佐助」(裏見返し)

八『吉原新もん句都々ゐつふし』(藤英堂板。幕末刊か)

吉原新もん句都々ゐつふし

藤英堂板」(表紙)

こりや又きやすめかとうけなひかほでひよくをしつかとつおひつ

朝さひてひるはしほれるあさがほさへもおもひノのいろがある

せがれにいけんはそりやおもてむき内しよじややつぱりさとがよひ」(一オ)

ばらもばたんもかれ、ばひとつはなでいりやこそわけがある

しんの夜中にふと目をさましはらのたつほどおもひだす」(二ウ)

あだなとしまになみかけられてとかざなるまひ朱子の帯

よひのくぜつにしやくとくおされふけてさしこむねの月」(二オ)

三味せんはうはきなふだがとふとひものよ三すじじやこひじのよせだひこ

月にあらしと花にはくもよそれで親父が女郎かひ」(二ウ)

くるたびごとにはいけんをきけど(上るり)八百やよろづの神さんにかたくちかひしゑん

むすび)それでおもひがきれうか」(三オ)

きたれたおとこをしとふのじやなひががほみりやむかしをおもひだす

なにもかもものをわきまへしだした恋じうきなかかふしてきられうか」(二三ウ)

いやと一度ははねてもみたが思ひやかかい、ともある

すひた花だがありやきがたかひどふせわたしにやおれはせぬ」(四オ)

思ひおもふてくろうもしたが(上るり)あの川はたの祖師さんへ日に千べんのおだひもくとなへてむりなおねがひを」今じや二人でれひまゐり」(四ウ)

鳥ならばちかくのもりへすをかけおててがれなくのをきかせたい

これはしたりとこのしたへゑつ中ふんどしわすれてきた物とりにやいかれぬ百のそん」(五オ)

てにとらでやはり野におけあのれんげそうとればたがひにあらがでる

うつやきぬたのあのつじうらもあわぬなるとでかただより

きのめかやのめくさのめわけてさがさにやならなひ人がある」(五ウ)

ぬしに近江は玉さかなれど(上るり)かたひやくそく石山のその月出しのはじめからしつぱり雨のいつけにぬれていろます唐さきの松よはつらひ床の内」これが粟津にいられうか」(六オ)

しんの夜中にふと目をさましどちらむひてもよぎのそで

かんがへてみれば見るほどつまらぬものよすひた人ほどぜうがなひ」(六ウ)

あひたさになみだにしめるふみをばやれどぬしはうは氣でまくらがみ

ふみののこりのまきがみよりもくろうするほどやせかくる」(七オ)

ながひ年きもさて氣にやならぬ(上るり)ねんがあひてのたのしみはやがておのじの名をつひではだぎしたて、きせてみてとのごのたけにしんじつがとくかばほんにうれしかる」月のたつをたのしみに」(七ウ)

おまへゆへなら人にもいわれきれてこの身がたつものか

ぶたしやんせた、かしやんせよふなとさんせぬしにまかせたこのからだ

ま、になるみもまたならぬみもほれたにちがひがあるものか」(八オ)

人にやさまくくろうさせて(上るり)あれ又あんなむりゆうてそんなそのよない、わけを」いやならいやだといわしやんせ」(八ウ)

九 『しんよし原新宅ど、ゐつぶし』

(藤英堂版。幕末刊か)

しんよし原新宅ど、ゐつぶし

藤英堂板

扇歌(表紙)

むかふかゝみにやつれたすがたたれゆへこんなにくろうする

二世も三世もかはらぬえんがきたゆめ見てものあんじ

ぬしがきせうはひとにはしれずひとりくろうもぐちながら」(一オ)

よのあけぬくにがあるならふたりがすんでつきぬはなしがして見たい
いとしいのじもりんきのときはつの、かたちとさきぐりに

まつの大夫といはる、みでももとはみばへのみどりから」(二ウ)

すへはどふかとあんじるやうなあさいほれ様はせぬわいな

人のはなとてとるまいものかとられたおまへのぶはたらき

ひとのはなをとりしおまへをなにうらもうぞとられたわたしがぶはたらき」(二オ)

かんがへて見れば見るほどこ、ろのぐちよせけんしのんでかよふから

しばし顔見ぬそのうさつらさふみのたよりでしやくをさげ

しゆびがわるひとこんどのじやまとかへすこ、ろをくみわけな」(二ウ)

しんたくもきのかはるとはぬしへのきんくなをしらきのへやのうち

はなのお江戸のまことのはなよ(コトハ)ふか川あさくさ飯たくにふかいあさいのいろなじみ引こしすんでしんたくもどふかと見にくる人のうちそれと顔みたうれしさにおつな事だ

かおもふほど口へだされぬとこのうちけしやうばしらじやなれども」こらそといおふふしがなひ」(三オ)

はれたおかたにさかづきさ、れのまぬさきからあかくなる

はれたぬし様におだまきつけてたぐりよせたやしんたくへ

つらい事しばしはさけにわしやわすれてもさめてちろりとおもひだす」(三ウ)

ふか川はしばしうきねのそのかりたくよやはりなじみのさとがよい

土手のよさむにかへろうよりもこよひばかりはとまらんせ

仮宅でふつとなじみがいま、たこ、でもはやたにんとおもはれぬ」(四オ)

あがる氣はねへよなど、てついくちぐるま土手を下へとひきこまれ

一日あはねばこ、ろがすまぬすまぬ内おばで、かよふ

ふしんしごとでさくわんのてまもこんな素がやへぬりつける」(四ウ)

すゝめどのおやどもきかぬにもうそのさきにさ、のあいてがえんとなり

さ、のあいてのついいしたえんてちよのちぎりにねづみなき

あふてうれしきわらいのたねがあさはなみだのたねとなり

あさのわかれのなみだのたねもついにやはなしのたねとなる」(五オ)

きをもむからだのこのしやくつうへぬしが手ひとつたのみたい

しやくのつかへに手をかすよりもぬしがまことにいのちでも
あきかぜのうらみがほなるくずのはよりもすえのちぎりがあんじられ

くずのはのうら見つらみはそりやあだほれよあきかぜたてぬかたきどし」(五ウ)

しんたくのふしん見にいたなど、はうそよとまるべらばがあるものか

一しやうつれそふにやうぼだなど、さきじやいかよしあんばし」(六オ)

はなしがいるぬしにはかへてひとりあんじるかごのとり

しよくにんふぜいにおまへのまことかげうづくからえんとなり

かげうづくからにやうぼになりてぢからくろふがして見たい」(六ウ)

しあんにふさげばツイかんざしがおちたところをた、みざん

あへばたがいにとふでもなろふふみでせひ／＼格子まで

み、はむまつらはかはづとひとのいけんなんのやめるぞかげいだす」(七オ)

かみもかたちもなんともいえぬなるほどおもひのますかゝみ

ないてわかれてまたあふたときうれしなみだでそでしほる」(七ウ)

ひとりねざめのまくらもさびしつれがあるならなかのてう

ぬしもうはきをたしなみなんしたへぬくろうもしらぬかほ

こよいまつ願のぬしはこずへのはなよそのながめかエ、くやし」(八オ)

しあんのほかとはよくいふたとへこちのおとこもそのとふり

人がばかだのなんのといふがかよひだしてはやめられぬ

しゆすのおびほどとけあふぬしがとふざかるのできにかゝる」(八ウ)

おきてみつねてみつまでど此かやのひろさせまいおんなのきをしらず

これほどまでにざりしんじつをぬしはうはきでしらぬかほ

つらいつとめもわらひはすれどほれたおまへはなかせがち」(九オ)

かげうづくではまじめにぬれど色にやかよふてぐちになる

てう／＼のすわらぬしりもむりではないよはなのすがたにまよはされ

女郎のしやくもつかへもなをしてやればあんまやばにもされぬはづ」(九ウ)

十 『しん撰詩人とゞ一』

(明治十年。まつさかやへ佐野金之助版)

しん撰詩人とゞ一

まつさかや」(表紙)

○うか／＼してあらアね

ふつと初会に迷はせられて「高館張燈酒復清夜鐘残月雁帰声」野暮なやうだが床いそぎ」(一オ)

○ぶぜうはうちまへさ

明るくならない世界へいつて「鶏鳴紫陌曙光寒鶯囀皇州春色闌」どうぞゆつくり寐て見た

い」(一ウ)

○よはずにやアいられない

月日たつのは矢よりもはやく「已見寒梅発復聞啼鳥声」けふは家例の弓はじめ」(二オ)

○きさんじなことさ

つれてにげれば湯治場めぐり「藍水遠從千澗落玉山高並兩峯寒」箱根七湯のかりじよたい」(二ウ)

まち人でもかけてごらん

膝とも談かうはなして見なよ「美人捲珠簾深坐嚙蛾眉」何をそんなにふさぐのだ」(三オ)

○やりつばなしにしてお、き

人にや元氣と見せてはぬれど「白髮三千丈綠愁似個長」しんの苦らう身にあたる」(三ウ)

○むかふみづにやつてみたのサ

旅は気さんじとはいふもの、「去国三巴遠登樓万里春」はなの古郷がなつかしい」(四オ)

○こつちでばかりきめてゐるのサ

もんぴもの日のさはりが出来て「客心争日月来往預期程」おもふやうにはいかぬもの」(四ウ)

○さむくていけないから

きん玉火鉢のたどんをだいて「辺地鶯花少年来未寛新」どうも脱れぬよるとでら」(五オ)

しからないで大めに見ておくれ

酒はよしなと言れたけれど「誰堪登望雲烟裏向挽茫々發旅愁」これちや飲ずにや居られな

い」(五ウ)

けふにきのふとふち瀬がかはり「洛陽訪才子江嶺作流人」あてにならないあすか川」(六オ)

酔が唄はふがこ、ろのま、よ「鳴鞭過酒肆絃服遊倡門」けふは一六ぞんたく日」(六ウ)

旅はたゞさへつらいといふに「莫遣行人照容鬢恐驚憔悴入新年」けふは取わけ大みそか」(七オ)

いな、きまはつてはら太鼓た、く「遺却珊瑚鞭白馬驕不行」豆でも喰たくなつたのか」(七ウ)

○みえのないのもきさんじさ

こしのふくべを手酌でのもんで「春山無伴独相求伐木丁丁山更幽」けふひは色気をすてある

ウ)

き」(八オ)

「???までもい、から???へやりたいよ

空はいつしか吹はらされて「(牀前看月光疑是地上霜)北にかはつたこの寒さ」(八ウ)

(広告)

御届明治十年五月

地本おろし

日本橋通四丁目東横町六番地

佐野金之助板

「(裏見返し)

十一 『はうた』(明治十五年。牧野惣次郎版)

はうた(手書き題簽)(表紙)

新撰ド、一

思ふおかたに謎ではないが解せて見せたいむねのうち

○浮気自由の権あるぬしを手管の糸にて捕縛する」(三十ウ)

○待に甲斐なき今宵の雨で内にゐながら袖ぬらす

○真におまへはラムネの徳利どふすりやおしりがすわるやら」(三十一オ)

○義理も不義理もあわれも無理も札(ペラ)の紙幣(かみ)から湧て出る

○うれしかあい、ひるねのゆめをエ、モ邪魔して手のしびれ」(三十一ウ)

○西洋づくりはおや馬鹿らしいかぞへる天井の板がない

○見捨しやんすな行末までもなど、写真へひとり言」(三十二オ)

○うその中からまことの事をいわせて見たさにこの苦勞

○坐しき相場をくるわす猫はちよつと二をあげ三をさげ」(三十二ウ)

○そふての苦勞は覚悟だけれど添はぬ先からこの苦ろう

○鯉だまして権妻にやなれど又も地しんでもとのねこ」(三十三オ)

○人もほめるし私しも能いと思つて見とれる主の顔

○私しのお尻は汽車軽きう早いと軽いで人がのる」(三十三ウ)

○更てまつ夜に見る秒時(せこんど)は一時くにせまるむね

○きせうせいしを活字に摺らせ宛名と月日をあけて置く」(三十四オ)

○じれて当なく待にはましかうそでも来るとの此はがき

○ぴんとこ、ろにおろした錠を義理といふ字がねじりきる」(三十四ウ)

明治十五年十一月八日御届

同年同月刻成発兌

定価金二十銭

編輯人 東京府平民

岸善四郎

本所区横網町壱丁目五番地

出版人 同

牧野惣次郎

本所区横網町壱丁目五番地」(裏見返し)

十二 『銭判断八卦好此』

(皓月堂与介發行。明治二十五年)

銭判断八卦よしこの」(表紙)

銭判断八卦好此」(見返し)

八卦よし此序

大和歌は猛き心をば和らげ鬼神を感じしむ男女の中をまやわらぐるは歌なり草庵題林の振り

玉とおもしろく屁玉のやうな御放屁いただきしもこ、に此よしこの妙なるは師伝もなく秘

説もなし百事に通づる八卦六十四卦に随ひ撰ぶれば其愛玩を願ふ而已

明治二十五年 辰の新ぱん

融和齋暢堂」(二オ)

占見出し

(一) 三十三。白丸黒丸図は省略」(二ウ)

(三十四) 六十四。白丸黒丸図は省略

畢

白は一銭

黒は龍形」(三オ)

座聴松風音」(三ウ)

一 ●●●●●●●乾為天

(判断文省略)

胸の蒸気のつひ燃すぎでいつも航海する苦勞」(四オ)

二○○○○○坤為地

あれさお待よ硝子で透(みへ)る只さへ人目の多い口」(四ウ)

- 三十五●○○○○火地晋
今の此身を写真にとらせぬしに見せたいやつれがほ」(二十一オ)
三十六○○○○●●●●地火明夷
松といふ字は開化の文字よ君にわかれりや木(ばく)ばかり」(二十一ウ)
三十七●●○○○○●●風火家人
言ふは怪気と堪忍ぶくろ縫て居るのも妻の義務」(二十二オ)
三十八●○○○○●●●●火沢睽
天晴立派な鯉をおさへでかした猫だと言われない」(二十二ウ)
三十九○○○○●●○○水山蹇
なんのばちかや調子がくるひ結ぶ糸さへきれたがる」(二十三オ)
四十○○○○●●○○雷水解
口も軽いがおしりもかるい夫でも娘めば身はおもい」(二十三ウ)
四十一●○○○○●●●●山沢損
ひるは夫の車を曳て夜るはおさせる照手ひめ」(二十四オ)
四十二●●○○○○●●●●風雷益
た、きながらも疑はしやんす赤い西瓜の気もしれず」(二十四ウ)
四十三○○○○●●●●●●沢天夬
かたく育てた箱入ものを誰に解れる夏氷」(二十五オ)
四十四●●○○○○●●○○天風姤
おまへがさうしたごま菓子いへば私しやお臍で茶をわかす」(二十五ウ)
四十五○○○○●●○○●●沢地萃
君の安否は片仮名便り百里とゞくも一時間」(二十六オ)
四十六○○○○●●●●●●地風升
智恵は付もの勉強次第鳥や毛物が芸をする」(二十六ウ)
四十七○○○○●●○○●●沢水困
したふお人は深山のさくらたどる路さへないつらさ」(二十七オ)
四十八○○○○●●○○●●水風井
浮気心は少しもないが恋しいお方があるばかり」(二十七ウ)
四十九○○○○●●○○●●沢火革
冷ちやわるいと座蒲団出すはあついわたしのこゝろいき」(二十八オ)
五十●○○○○●●○○●●火風鼎
手鍋さげがおまへとくらしや何の不服があるものか」(二十八ウ)
- 五十一○○○○●●●●震為雷
帯やしごきで七巻半にまいてやりたや明の鐘」(二十九オ)
五十二●○○○○●●○○●●艮為山
規則で鳴のかアノ明がらすたまにや日曜(どんたく)するがよい」(二十九ウ)
五十三●●○○○○●●○○風山漸
主のこゝろと夏売る氷解るととけぬで苦勞する」(三十オ)
五十四○○○○●●●●●●雷沢婦妹
風船にフット乗られこちや登りつめ先は浮気な空だのみ」(三十ウ)
五十五○○○○●●○○●●雷火豊
若や夫かと門の戸明て見れば逃出す探訪者」(三十一オ)
五十六●○○○○●●○○●●火山旅
猫や狐がうき世になけりやこんにや苦勞をするものか」(三十一ウ)
五十七●●○○○○●●●●巽為風
斯なりや互ひの手ごととや行ぬ入ざるまへ人のくち」(三十二オ)
五十八○○○○●●○○●●兌為沢
主が来たかと窓の戸明りや憎やからすの阿房なき」(三十二ウ)
五十九●●○○○○●●○○●●風水渙
嘘も誠も仕方で知れる隠すおまへの気が知れぬ」(三十三オ)
六十○○○○●●●●●●水沢節
世帯かためてやれうれしやと思やおまへのまた浮気」(三十三ウ)
六十一●●○○○○●●●●●●風沢中孚
三味線の撥を小楯に欠伸を隠し無理にこぼしたそら涙」(三十四オ)
六十二○○○○●●○○●●雷山小過
惚たお方は皆筒袖ですがる袂のないつらさ」(三十四ウ)
六十三○○○○●●○○●●水火既濟
心とこゝろがあひさへすれば性があはふが合まいが」(三十五オ)
六十四●○○○○●●○○●●火水未済
ぬしは原告私は被告まはす屏風の判事やく」(三十五ウ)
明治廿五年四月八日印刷
同 年四月十日出版
愛知県尾張国名古屋市江川町百九十八番戸
編輯兼印刷発行者 佐藤富

発売所	発行所
名古屋市江川町四丁目 皓月堂与介	名古屋市江川町四丁目 皓月堂与介
名古屋市門前町三丁目 佳月堂安吉	
同 市本町二丁目 新月堂逸三郎 (裏見返し)	

Dodoitsu (Japanese Limericks)

KIKUCHI Shinichi

Abstract : This is a presentation of *dodoitsu* (Japanese limericks). *Dodoitsu* is a song sung to the accompaniment of a *shamisen* (*samisen*). It was popular in the Edo, Meiji, Taisho and Showa periods.